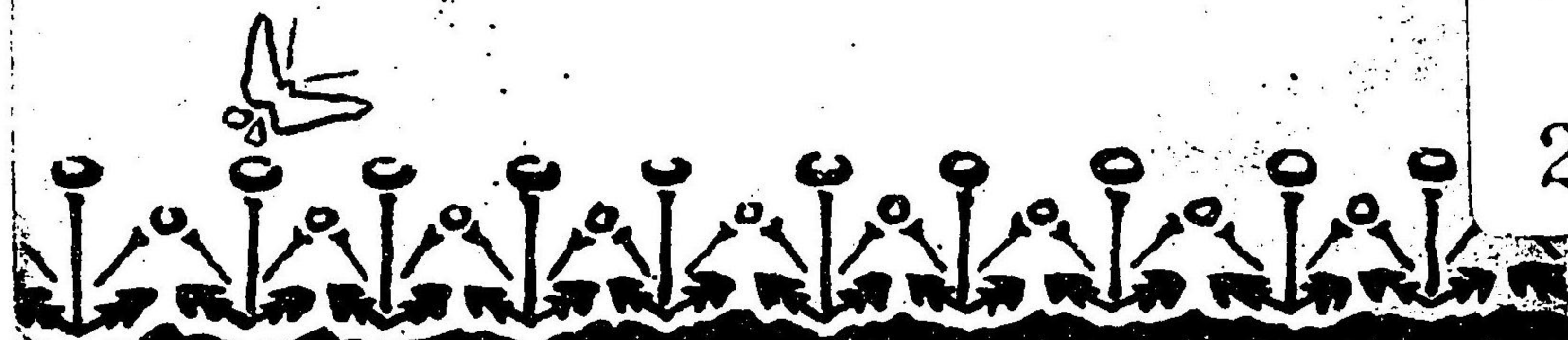


146  
563

# 情心學全

4731



特

2



特64

226



素川子著

學生

東京

開發社

社



226



情之學生の序

序  
我は此の書の著者素川子とは、また一面識も  
ないのである。然るに先頃手紙を寄越して、  
此の書を出板するから、是非一讀して呉れよ  
と、懇々依頼された。そこでどんな事を書い  
てあるかと讀んで見ると、中々面白いのであ  
る。併し我は讀んで見た丈で、非常に面白い  
が、表題が面白くない、改めてはどうかといつ  
て遣つた。すると素川子は、直に返事を寄越

文

(一)



して、何んどでも適當な表題に改めて呉れと  
のことであつたから、我は「情之學生」といふ名  
に改めた。其の次第は、書中の内容は、どんな  
學生にもありがちなことであるが、感情の厚  
いものでなければ、こんな事を一々心にとめ  
ておくことが出来ぬのである。此の書を見  
て、素川子は感情の厚い人であるといふこと  
を我は推知した。そして實に數時間讀む間  
に、我をして悲しましめ、泣かしめ、喜ばしめ、笑

はしめたこと、幾回であつたか知れぬ。我は  
一体涙脆いたちではあるが、こんな小冊子で、  
こんなに泣かせられたことはない。これも  
素川子と似た様な境遇があつたのを、此の書  
を讀んで、聯想したからでもあらうが、兎に角  
に著者が感情の人でなければ、讀者の感情を  
發動せしむることは出来ぬのである。よつ  
て我は「情之學生」と名じた。此の書讀む人も、  
定めて同様に感じ、私の命名に賛成するであ



らう。

明治三十四年七月下旬

湯 武 居 士

緒 言

本稿ハ先年湖處子ノモノシタル歸省ニ感シテ其文章其體  
 裁ニ摸倣シテ田舎ノ一師範學生ガ自分ノ境遇ヲ叙シタル  
 モノナレバ其體裁ノ前著ヲ眞似タルハ勿論其風景境遇宛  
 モ相似タルトコロハ喜ンデ其文字文句ヲ配置シタルトコ  
 ロ往々ナキニ非ラズコレ稿者自ラ同情ヲ表シ歡迎シタル  
 形跡ニ外ナラズ

著 者 識



情之學生目次

目次終	第一	懷鄉	一
	第二	歸思	一三
	第三	歲暮	一九
	第四	歸鄉	二四
	第五	吾鄉	三二
	第六	吾家	四一
	第七	鄉黨	四六
	第八	新年	五五
	第九	旅行	六〇
	第十	離別	七〇



情

之學生

第

懷鄉

牀前看月光  
舉頭望山月

疑是地上霜  
低頭思故鄉

疎雁相呼月若霜

一燈光底惹愁長

誰憐萬里天涯客

獨擁寒衾憶故鄉

身長而未孝養常居朝夕未慰籍者不孝莫大焉執手未登於校  
門繙圖書未共相見者友愛莫少焉父曰母曰願クハ今暫ク許  
シ玉へ弟ヨ今暫ク寂寞ヲ堪へヨトハ我去年四月始メテ師

素川子著



範學校ニ入學セント家ヲ辭セシ時ノ言辭ナリシ爾後夏季休業ノ際一度歸省シテ三十日愉快ナル有限生涯ヲ經過シ再ビ辭シテ他郷ノ人トナリシ以來決シテ故郷ヲ念フ勿レ種々ノ煩憂ヲトシ若シ病患ヲ生ズルニ至レバコレ最モ不孝トイフベシ又專ラ其業ニ努ムベシトイフ慈愛ナル兩親ノ懇諭ハ我耳底ニ徹シテ敢テ消失セザルモ或ハ時ニ學友ノ故郷ノ訃音ニ接スルコトヲ見聞スル毎ニ同情ヲ惹起シ日數漸ク重過スルニ應シ懷郷ノ念ハ漸ク頻繁トナリ晝間ハ學業ノ爲メニ絶斷スルヲ得レトモ靜夜人定マルノ後ハ輒チ故郷ハ我ヲ擊チテ今昔ノ感ヲ増キルオリ此夢間ニ於テ忽然身ノ故郷ニ在ルコトハ我ノ天幸ナリ然レトモ常ニ煩惱ヲ殘存スベキ凶夢ノミナルハ甚ダ堪ヘ難キ所ナリ

而シテ苦學ノ間ニ於テ最モ價值ヲ有スル愉快ハ故郷ノ人ニ接シテ故郷ヲ聞クコト及吾家ノ音信ナリ  
我性元來山川ニ慣レズ網罟佃漁亦爲メニ拙ナリ然ルニ昨夢ニ於テ多ク漁獵セリ我幼時之ヲ故老ニ聞ク斯ク如キ夢ハ必ズ不吉ニシテ或ハ人ノ死ヲ豫告スルナリト即急ニ我胸ヲ刺撃シ父ヤ如何ニ母ヤ如何ニ弟ハ如何ナラシト此想像ハ未ダ無キ痛苦ヲ與ヘタリ由テ校内ニ在ル來翰函ヲ檢スルコト其度ヲ知ラズ又應接人ノ呼聲悉ク我ヲ疑懼セシメタルナリ  
十一月廿三日ハ吾校ノ新築落成式ニテ是ニ參列スル爲メ郷友亦來校シ我ヲ訪ヒ地方ノ情況ヲ告グ且吾父ノ書翰ヲ與ヘタリ我忽チ之ヲ披キ反覆凝視スルニ果シテ病氣ノ二



字ヲ見タリ郷友告ゲテ曰決シテ意ニ介スル勿レ晝間ハ臥床セラレズト我之ヲ聞テ益憂フ我他郷ニ出デ爲メニ膝下ニ使侍スル能ハズ加之我が爲ニ猶ホ病苦ヲ忍ビ不當ノ職業ニ勞セリ嗚呼父ノ苦痛幾何ナラン母耶其病者ヲ看護シ獨リ家事ヲ整理ス其痛心如何ナラン弟ハ又能ク枕頭ニ侍スルヤ渠幼少ノ身加フルニ性質俊活ナレバ或ハ我ニ代テ病ニ事フベキノ志想乏カランカト我此等憂悶ノ爲メ覺エズ久濶ノ故人ヲ佇視シ之ヲ怨恨スルガ如ク遂ニ彼ヲシテ不審ヲ懷カシメ不興ヲ感セシムルニ至レリ然レトモ故人之ヲ諒察シ切ヤ我ニ向テ其憂フベキ病氣ニ非ルヲ辨解シ又強ヒテ意ヲ勞スルナキヲ勸告シ我意ヲシテ只管今日ノ祝典賑盛ニ移轉セシメンコトヲ務メタリシモ我已ニ之ヲ

聞テ心爲メニ窘束セラレテ轉ズル能ハズ唯僅ニ彼ニ向テ故郷ノ報ヲ執リタルノ勞ト厚意ヲ謝シ併セテ彼ノ歸郷スルノ時機ヲ籍ランコトヲ請ヒ約シテ別レタリ此日吾郷ノ三小學校高等科兒童八十餘名其校長教員ニ引率セラレテ來着セリ我等ハ曩キニ既ニ此報ヲ得タレバ在山同郷ノ友ニ謀リ之ガ歡迎ニ準備スル所アリタリ然レドモ本日外出スルヲ得ザレバ出デテ之ヲ途ニ迎ルコト能ハズ因テ他校ニ在ル同志ヲシテ其周旋ニ當ラシメ我等ヲ代表シテ渠故郷ノ學弟ヲ迎ヘシメタリ而シテ午後纔ニ閑暇ヲ得タレバ即渠等ヲ其旅宿ニ訪ヒタリ久濶ナリシ兒童ハ活潑爛漫タル容態ヲ以テ我等ニ遭遇シ我ト其愛情ヲ交易シ渠等ハ其天真ヲ以テ起テ容ヲ整へ禮ヲ無言ノ中ニ盡セ



リ我ノ感喜言詞ニ盡シ難ク如何ニシテ渠等ヲ撫センカ泣  
 カント欲スレドモ泣ケハ婦人ニ近シ言ハシト欲スレトモ  
 嗚咽シテ能ハズ唯暗涙ヲ以テ愛ヲ告ゲタリ見聞ス渠等ハ  
 毛布ヲ背ニ負ヒテ旅行シ三度ノ食皆握飯ナリ而シテ其校  
 長教員亦其苦ヲ同フスト轉々感歎ニ堪ヘザリシナリ我久  
 シク茲ニ留リテ此慈愛親情團樂一家ノ如キ安樂世界ニ在  
 ラント欲スレドモ時間ニ限リアレバ不得已明日ヲ約シテ  
 辭セリ

翌廿四日ハ吾校一般ノ縦覽ヲ許シケレバ渠等亦其校長教  
 員ニ導カレテ來校セリ我ハ吾學友ニ揚言シテ吾郷ノ兒童  
 ナルコトヲ告ゲ意氣自ラ昂然タリシナリ我元ハ渠等ヲ誘導  
 シ懇切之ガ爲ニ盡ス所アラザルコトヲモ我ニハ我今日ノ

職責有以濟意ノ如ク去歲只吾職務ノ場所ニ於テ之ヲ迎  
 フルコトヲ得ル耳渠等ハ未ダ知ラザル大建築ヲ見嘗テ見  
 ザル大校舍ヲ參觀シ尙尙宏壯ナル講堂ニ於テ莊嚴ナル  
 聖影室ノ前面ニ拜伏シ 聖徳ヲ仰慕スルノ榮ヲ得テ戰々  
 兢々トシテ其魂將ニ消騰セントシ僅ニ此室ヲ脱セントス  
 ルノ所ニ於テ計ラザルキ知人ノ我ニ迎ヘラレ驚悟恐縮ノ  
 態ヲ露ハシ願フガ如ク竊ルガ如ク親愛ナル面相ヲ以テ禮  
 ヲ執リタリ此時我愛ノ情ハ亦各兒童ノ上ニ溢シテ數滴ノ  
 涙トナリタリ後渠等ノ將ニ辭セントスルヤ吾師範學校長  
 ハ諸教員ト共ニ出テ之ヲ愛撫訓誨セリ我側ニ在テ最モ  
 感謝ノ意ヲ呈シ渠等ノ最モ幸榮ナルコトヲ喜ビタリ去ヨ  
 リ門側ニ於テ彼一行ヲ送リテ離別ヲ告ゲ一行ハ之ヲ謝シ



テ整然出門セリ吾等ハ之ガ後貌ヲ睨視シ時ノ移ルヲ知ラザルニ至レリ、此際昨會ノ友ニ托シテ吾家ニ遣リタル書狀左ノ如ク認メタルナリ

拜呈十一月十九日付の書狀到着委細了承仕候御事情直ちに校長の御許迄申上置候間此段御安心被下度候陳者此度之新築校舎及敷地又校舎位置等別紙圖面の通りに御座候御快氣の砌緩々御覽下され度候本日は午後一時より式相始まり云々(校舎裝飾式ノ模様)

二白

承り候へば父上には御病氣の由兼て時候變りの御持病殊に不相應なる御辛苦御勞力の結果に候はん事と恐入奉り候何卒重々御療養なし被下度祈上候私事常に吾年

齡を省み素志は成らず且小成すら人に後れたることを思ひ殊に残念に不堪候されば今に至る迄御兩親に苦勞相懸け居候事誠に相濟み不申存候併しながら後悔先に立たず候へば唯此上は身を損せぬ様勉勵仕り卒業致し候事此上なき事と決意罷在候右の次第に御座候ゆる御病氣杯承り候ては以ての外氣遣ひ申候何卒可なりの御家業なされ朝は早く候とも晩は暮れざる内にはやく御止業なされ夜業杯は決してなされざる様猶ほ御儉約よりも常に御滋食被下度若し御健康に御座なく候ては不肖が何程孝養仕度存居候とも其甲斐御座なく義に候世の中には未だ孝養せざる内に早く親を失ひたるもの澤山に候然るに私は陰に御兩體の未だ老い玉はず御壯



健なる事を喜び居候事に御座候へば、嚴重に志御療養御  
全癒なされ御安全に御暮し被下候様祈上奉り候  
母上様へ 父上の御病氣にて、嘸々御心勞なされ御辛苦  
の事と察し上候何卒心強く御介抱なし被下度願上候  
〇〇 父様の御病氣には先生の教々の如くよく事へ  
よ決してさする氣まゝを以ては宜しからず、母様を助け  
てよく事へよ又學校へもよく行て勉強せよ、先生にも譽  
められ、人にも譽められて、父母を喜ばしむる様なる行儀  
の故におをなし、さ善き生徒ならざるべからず、我等が家  
は古きすぢやうある家、昌えたる家、亡せし種、父母より余  
に至る迄、慈善の家なり、然るに今は一時不運にて狭き所  
にあり、決して恥づること致なし、我等が進んで家を興

さねばならぬなり、父母を元、の如く豊かに樂になさしめ、  
祖父母祖先の靈を昔の如く並派なる佛壇に奉らねばな  
らぬ事寸時も忘るゝなかれ、若し強弱も候へば足  
は裸になりても學問さする故に、冷やみ、第に身體が大切  
なれば平常より食物を食ひ、或は過食等のなき様、又食時  
後直ちに寐る等のことなき様は、よく運動して毎日面  
白く遊びて時に書物を心掛けよ、決して身體を傷くるこ  
と勿れ、病氣を起すこと勿れ、大丈夫に成長せよ、幸によく  
小兒心にも兄が一心に思つて寸時も忘れず申し送ること  
を、耳に入れよ、  
又此の箱は本日晝我々生徒に配布せられ、料理も候他  
の全條は皆面白く之を食したれ共、兄は思ふ所おれ候之



を収めて残し置候又一の餅の包みは本日の來賓一同へも配布せられし棟上餅に候吾れ折角父上の病氣の手紙令朝來着せるを以てこの土産を携へ歸宅せんと思ひ居候處丁度〇〇先生來校致され候ゆゑ之に依頼して差送り申候これは皆うなたの平常の勉強と行儀のよきを賞する爲に差上候夫れゆゑに一先父母に見せてよき物を上げてうなたも貰つて食へよ箱の中には、うなたの好める砂糖餡の餅もあるなり又棟上餅は大きなれば焼て貰つてあがれ、兄は山口よりそなたが喜ぶことを念ふて亦喜ぶなり、今日より三十日の後日曜日が四度ありたる後は冬季の休業にて歸るべく候其時には又何か土産もあらん、何か入用と思ふもの有之候へば、松永に行て端書を

買ひ、父様に書いて貰ふか又かなにてもよし自分書いて知らすれば買ひて持歸るべく候

第二 歸志

宿志蹉跎歲月侵。

時看遠逝鴈魚音。

一行一字魂將斷。

如紫如蓬感也深。

雨聲呼覺刀環夢。

燈影照來遊子心。

霧愁壹鬱消難得。

暗淚潛々灑秋衾。

留學生ノ歸省スルコトニ對シテハ何物ノ樂カ之ニ加カン  
又是ノ如ク百人全感ナルモノナシ而シテ又我ノ如キ其情  
ノ盛ナルモノ無カラント唯我獨尊ス、俟者一日如千秋ト  
ヤ此三十日間ノ長キヲ實ニ平常ノ半歳ノ如ク、或ハ常ニ學



修ヲ爲メニ忽ニ返テ回到スル日甚遅クトシテ進行セズ、又平常日曜ノ如ク安樂ナルハチキニ此頃ノ日曜ハ反テ嫌忌スベキヲ感ジ、何が故ニ緩ク遅クタルヤ、早ク去リ疾ク月曜ヲ迎ヘヨト小言スルニ至ル、猶何ヲ土産ニセシ、渠レ何ヲ喜ハント研究スルガ故ニ、平時市街ヲ通行スルニ際シ嘗テ側目セザル自ラモ兎角彼方ヲ視此方ヲ眺メテ人ノ我ヲ笑フコトヲ覺ル能ハザリシ、然レドモ原來毎月半圓ノ豫算ヲ以テ預金ヲナシ之ヲ以テ毎月ノ諸費ヲ支辨スルニ由リ決シテ殘餘ノ生ズベキナク、購讀セント欲スル某雜誌ヲモ賒ル能ハズ況ンヤ其他ヲヤ、學友ヨリ客ナリト毀ラレ、不活潑ヲリト彈セラル、コトヲ忍バザルヲ得ザルナリ、此他毎月ノ修理費十五錢アリ、是我ノ臨時支出ノ豫備トシ

又貯蓄シ暑休已後四月分合計六十錢ヲ得タリシニ果シテ演習費及紀念碑ヲ支出アリ、加フルニ演習後耳塞ガリテ醫療ヲ受ケタル費用ヲ爲メ忽チ消失シタレバ今如何ニ土産物ヲ購求セシトスルモ意ノ如クナラザリシナリ、我ハ自ラ強フシテ謂フ書生ノ身ナレバ假令土産ヲトモ郷黨之ヲ譏テザルベク、弟亦強テ落膽セザルベシ、幸ニ我餘ス所ノ筆鉛筆、石筆アリ之ヲ以テスルトモ或ハ弟ノ喜ビヲ買フニ足ラシト斯ノ如ク決心シタルハ蓋シ堪ヘザルヲ堪ヘタルナリ

十二月十日郷友來山シ我ヲ訪フテ吾父ノ快癒ヲ告ケ且一封ノ書狀ヲ與ヒタリ、コレハ維レ吾最愛ナル七歳ノ一弟〇〇ヨリ贈ル所シ假名ヲ以テ認メタル書信ナリ、我ハ之ヲ披



開スルニ先チ既ニ渠ノ愛情ヲ喜ビ宛モ吾目渠面ヲ見ルガ  
如ク感情溢胸セリ而シテ書狀ヲ披ケバ中ニ一片ノ紙面ニ  
僅少ナル汚濕シタル假名文字ノ蹟左ノ如ク表ハレタリ

おくりもの ありがたく いたゞきました  
ちゝのびやうさ よし よくかいはうします  
がくかうへ よく ゆきます

おかへりをまします みやげはなにもいりません  
我性感情ニ濃ク常ニ溢レテ涙トナルコト受業ノ間ニ於テ  
且往々ナリ、自修室ニ在ルノ際ハ時々袖ヲ絞リ爲メニ學友  
ニ怪マレ其耳語ヲ聞クコト屢々ナリ、是皆郷家ニ遣ハスベ  
キ書狀ヲ認ムルノ時ニシテ殊ニ弟ニ向テ述ブル時ニ於テ  
其涙頻リナリ、今彼ノ愛スベキ手、不如意ナル指ヲ以テ而モ

能ク書シ得タルナランコトヲ思ヘバ斷腸限リナク、此文字  
ノ一字ハ我ヲシテ千金ヨリ貴カラシメ字々句句々孔孟ノ遺  
語ニ優リテ心腸ニ銘セシナリ、嗚呼渠克ク吾言ヲ了セリ、渠  
ハ今小學校ノ尋常科一學年ナリ、去年我師範學校ニ入學セ  
シト同時ニ渠ハ始メテ小學校ニ入レリ、願ミレバ彼ノ愛ス  
ベキ柔和ナル腦髓已ニ吾ガ爲ニ惱動セラレタラン、吁皆我  
ノ罪ナリ、吾年長シ漸クニシテ貴重ナル學校ニ入學スルヲ  
得タリシ以來歳時茲ニ移リ殆ント一星霜ヲ經タリ、而シテ  
此間ニ於テ如何ニ能ク吾德行ヲ涵養シタルカ、又如何ニ能  
ク鈍愚ナル心志ヲ研磨シテ學問ノ端緒ヲ開キタルカ、願ウ  
テ以テ已往ノ行績ヲ察シ又諸學科ノ成績ヲ驗考スルニ嘗  
テ入學ノ始ニ於テ豫期セシ所ニ違背スルコト遠ク加之一



ノ見ルベキモノアラズシテ學友ニ從フ能ハザルヲ悟リ悚然爲ス所ヲ知ラザリシ、夫レ此ヲ以テ何ノ顔アリテ父母ニ對シ、弟ニ對センヤ、歸省シテ「我既ニ一ケ年ノ修業殆ント終リタリ」ト父母ニ報セザルヲ得ザレドモ良心ニ鑑ミテ豈疚シカラズ感交、至リ惘然自失スルコト久シ、忽然突如トシテ目ニ映寫シタルモノアリ「おかへりを、まぢます」ノ九文字ナリシ、驚テ己レニ歸レバ我ハ机上ニ披狀シ、同室學友ハ無語ノ中ニ我ニ對シ「一室肅然タリ、即愧赧シテ書狀ヲ収メ而シテ決意セリ」曰過者不及、往者不可追、應慎後來矣ト次テ鐘聲ニ促サレ、席ヲ収メテ寢ニ就ケリ、此日以後ハ懺悔ノ結果トシテ歸省ノ時期ヲシテ最モ短縮セシメ圖ラザリキ今ヤ十二月廿四日ハ到レルナリ

第三 歲暮

生年不重來

一日難再晨

及<sup>テ</sup>時<sup>ニ</sup>須<sup>ク</sup>勉<sup>ス</sup>強<sup>ス</sup>

歲月不待人

年光回轉急<sup>ナリ</sup>於<sup>リ</sup>輪<sup>モ</sup>

每<sup>ニ</sup>值<sup>フ</sup>除<sup>ク</sup>宵<sup>ニ</sup>思<sup>ハ</sup>慨<sup>然</sup>

志業未<sup>ダ</sup>成<sup>ラ</sup>加<sup>フ</sup>一<sup>ニ</sup>歲<sup>ニ</sup>

唯<sup>ニ</sup>喜<sup>ブ</sup>雙<sup>ノ</sup>親<sup>ノ</sup>共<sup>ニ</sup>安<sup>ク</sup>全<sup>ナル</sup>

每<sup>レ</sup>遭<sup>フ</sup>歲<sup>ニ</sup>晚<sup>ニ</sup>獨<sup>ニ</sup>悲<sup>シ</sup>傷<sup>ム</sup>

某<sup>レ</sup>奈<sup>シ</sup>吾<sup>ノ</sup>儂<sup>ノ</sup>感<sup>ハ</sup>慨<sup>長</sup>

雁<sup>ノ</sup>警<sup>シ</sup>九<sup>ノ</sup>天<sup>ニ</sup>聲<sup>ハ</sup>斷<sup>續</sup>

燈<sup>ノ</sup>殘<sup>シ</sup>孤<sup>ノ</sup>室<sup>ニ</sup>影<sup>ハ</sup>淒<sup>涼</sup>

霜<sup>中</sup>苦<sup>シ</sup>竹<sup>ノ</sup>能<sup>ク</sup>持<sup>テ</sup>節<sup>ヲ</sup>

雪<sup>裏</sup>寒<sup>シ</sup>梅<sup>ノ</sup>仍<sup>ホ</sup>放<sup>ツ</sup>香<sup>ヲ</sup>

兀坐蕭然眠不行

深宵冷氣透人腸

一日ノ暮ニハ一日ノ事ヲ省ミ、一歲ノ暮ニハ一歲ノ事ヲ省ミル、歲暮ハ即一年ノ終極ニシテ此間ニ於ケル凡百ノ事業



一止スルモノナレバ種々ノ社會ニ在テ各異ノ事業ヲ執ル  
 モノ或ハ萬端ノ境遇ニ處スルモノ皆悉ク之ヲ愛惜セザル  
 ナシ況ンヤ我ニ於テヲヤ吾齡既ニ丁ヲ踰エ愛惜スベキ歳  
 暮ニ遭遇セシコト甚ダ多シ抑幼時ノ歳晚ハ其感少ク漸ク  
 生長シテ智識ノ進歩スルニ應シ時ヲ惜ミ之ヲ利用スルニ  
 至リ歳暮ノ感頻々トシテ念頭ニ萌生スルナリ我數年已前  
 ニ比スレバ一トシテ愉快ナル歳暮ヲ送リタルコトナク毎  
 暮輒チ鬱トシテ日誌ヲ緋キ我業ノ進歩セザルヲ歎ズルノ  
 不吉ナル期日トナルノミ加フルニ不徳不材ノ身ヲ以テ而  
 モ貴重ナル國家ノ職務ヲ奉ズルコトヲ省慮シテ未ダ嘗テ  
 日誌ヲ投ジテ拱手セザルハナシ今ヤ陰ニ喜ブ今年ハ如何  
 ナル歳々我身ハ如何ニ變化セシカ我ヲシテ始メテ愉快ナ

ル境遇ニ移轉セシメタルモノハ誰ツヤ自ラ我ニ非ルカヲ  
 疑ウテ轉々今昔ノ感ニ堪ヘザリシナリ今年ノ日誌ヲ見ル  
 ニ四月十五日師範學校ニ入學シ爾來嚴正ナル規律整切ナ  
 ル陶冶懇篤ナル教訓教授ノ下ニ生活シ恰モ世塵ヲ避ケテ  
 聖郷ニ遊ブガ如ク朝ニ最敬ナル師ニ親炙シ夕ニ最愛ナル  
 同志ノ朋ト起居ヲ共ニス即天ノ父ヲ得天ノ師ヲ得又天ノ  
 兄弟朋友ヲ得タリ而シテ其父師我ヲ愛シ兄弟朋友我ヲ捨  
 テズ父師我ヲ見ル子ノ如ク休戚コレ同フシ兄弟朋友百餘  
 人同時ニ生レ同親ニ養育セラレタルガ如ク上下同心藹然  
 トシテ一隙ノ邪ナシ共ニ聖徳ヲ仰慕シ共ニ軍人ヲ慰勞シ  
 共ニ國家ヲ念ウテ未ダ嘗テ怠ルコトナシ我ハ天ニ謝ス吾  
 性祖先ノ善性ヲ受ケ祖先父母ノ特遇ヲ受ケ成長シタレド



モ中途志ヲ得ズ不如意之ガ爲メニ進路ヲ失シ五里霧中ニ  
 彷徨シ殆ント人界ヲ去テ邪暗ニ陥リ父母祖先ヲシテ現世  
 及冥土ニ泣カシメントシタルニ今年自ラ計ラザリキ能ク  
 我ヲシテ此高尚ナル世界清麗ナル生活ニ與ラシメントハ  
 又祖先父母ニ謝ス遺傳未ダ全ク消亡セズ而シテ今日ノ幸  
 運ニ會シ吾進路始メテ明々皓々トナリ祖先父母ノ賜賦ス  
 ル所ノ性能ヲ修養シ圓滿タル嫡嗣タルヲ得ンコト或ハ難  
 キニアラザルニ至ラントスルヲ  
 十二月廿四日午前ハ定例ノ授業ナリ午後終業式ノ舉行ア  
 リ我等尋常簡易講習豫備科生二百余名 聖影ニ對シテ整  
 列シ校長教員列席ス先ツ 聖壽萬歲ヲ奉祝シ次ニ 勅語  
 ヲ奉聽シ終ニ校長ノ訓諭ヲ受ケ式ヲ畢リタリ我等斯ノ如

キ光榮ヲ負ヒテ本年ノ業ヲ終ヘ歲暮ヲ迎ヘタルハ決シテ  
 忘却セザル所感喜ノ度豈言語ノ盡ストコロナランヤ  
 抑事終始アリ物本末アリ本末備ハリテ事始テ整フ故ニ始  
 ト終トハ如何ナル境遇ヲ論ゼズ皆忽ニスベカラザルナリ  
 而シテ我等臣民ノ日夜佩服スベキ所ノモノハ實ニ明治廿  
 三年十月三十日ノ 勅章ナリ之ヲ聞カザルモノハ吾臣民  
 ニアラズ之ヲ服膺セザルモノハ其責ヲ盡ス能ハズ嗚呼此  
 尊重スベキ 聖諭ニシテ一度我ヲ去ラシメハ我寧ロ死ス  
 ベキナリ故ニ一日ノ始ニ於テ之ヲ誦シ暮ニ於テ之ヲ省ミ  
 一年ノ始ニ於テ之ヲ誦シ暮ニ於テ之ヲ省ミル今ヤ幸ニ此  
 終業日歲暮日ニ於テ之ヲ拜聽シ奉ル嗟如何ニシテ 天恩  
 ニ奉報セン我等草莽ノ臣伏シテ將ニ奉答スル所アラン



ヲ誓期スルヲ得タルハ最モ今年ノ暮ヲ喜ブ所以ノ一ナリ

### 第四 歸郷

曉鴉啼散曉雲橫○ル 竹杖芒鞋帶夢行○ク

月影漸収人未起○キ 露叢深處草虫聲○ク

廿四日ハ旅装ヲ整フルガ爲メニ忙シク且相互告別ノ禮ヲ執ルガ爲メニ互ニ各室ヲ巡ル等ノ混雜ヲ以テ暮レタリ翌廿五日ハ拂曉爭テ校門ヲ出デ忽チニシテ大舍空闊人影僅少トナリ各室亦歳暮ノ休息ヲ爲スニ似タリ我ハ途中矢原小郡ノ親戚ヲ見舞ハザルヲ得ザルヲ以テ全郷ノ友ト相伴ウテ歸路ニ就ク一能ハザリシハ遺憾ナリ午前七時殘留セル數輩ト最後ノ辭校ヲ爲セリ此日朝來降雨シ遙ニ我等ノ

ヲ悲ムガ如シ然レモ此情ヲ以テ歸郷ノ情ニ代フベカラザレバ即雨ヲ犯シテ出發セリ第一着トシテ矢原ヲ訪ヒケレバ叔父母ハ我ヲ迎ヘ我ハ一家ノ無事ヲ祝セリ而シテ嘗テ盡ス所アリシ從弟某ノ就學談ハ本日ノ主ナル談話ナリ某ハ今春高等小學校ヲ卒業シ爾來期ヲ失フテ未ダ學校ニ學ハズ然ルニ師範學校ニ入學セシメントハ彼兩親ノ懇望スル所彼自ラ企望シ又我ノ贊スル所ニテ豫メ決定スレモ全豫備科ニ入學センモ年齢未ダ二三歳ヲ不足セルニヨリ其間或ハ私塾ニ學バン或ハ尋常中學ニ入ラントスルノ際ナリ我ハ渠及其父母ノ依托ニヨリ曩キニ種々ノ勞ヲ執リ或疑問ノ參考ニ供シタルコトアリシガ今日又我ガ經驗談ヲナシテ渠ノ進路ヲ蹉跎セザランコトヲ勸諭セリ而シテ一



段落ヲ告ゲヌリ  
 叔母ハ曰ヘリ「昨夜ハ小郡ノ例祭ナルニ其案内狀昨夜六時  
 頃ニ至リ漸ク到着シケレバ行クコト能ハザリシ」ト此語尾  
 ニ次テ其來書ヲ示セリ、我直ニ之ヲ讀下スルノ間ニ於テ叔  
 父及其他ノ一同ハ一口ニ曰フ、其遲着セシハ渠ノ罪ニアラ  
 ズ即其狀ノ出郵ハ早ケレバ只郵便配達ノ都合ニヨリシナ  
 ラン」ト我之ヲ聞キ其狀ヲ見テ亦然ルヲ知リ猶一同ノ既ニ  
 小郡ノ罪ニアラザルコトヲ認識セルヲ喜ビタリ次デ我ハ  
 忽チ曰フ「唯今ヨリ同伴仕ラン」ト斯ク發起シタリシニ叔母  
 第一之ヲ贊シニ叔父三ニ一同ハ同意トナリ茲ニ其用意  
 ヲ急促シ遂ニ我ハ叔父ニ伴ハレテ此家ヲ辞シ小郡ニ向ヒ  
 タリ時ニ午後一時ナリ

小郡村小郡市街ノ西山麓ナル一區字ハ山手ニ在ル親戚ノ  
 家ニ我等ノ着セシハ午後三時ナリ、彼ニ於テハ己ニ二條ノ  
 不滿ヲ懷抱セリ、一ハ「何故ニ矢原ヨリ來客ナキカ」一ハ「我々  
 歸省セザルヲ而シテ我若シ寄家セズシテ直ニ郷家ニ向ヒ  
 タルカ、斯ノ如キコトハ決シテ無カラン然レトモ或ハ」トナ  
 リ初メ我等ノ未ダ着セザルヤ途中一僧ニ遇フ之ヲ見レバ  
 從弟ノ一人ナリ、此レ今矢原ニ向テ迎招ノ爲メニ來ルモノ  
 ナレバ相語テ互ニ其實ヲ得、亦伴フテ歸來セルナリ、先ヅ相  
 互ノ健康ヲ祝シ終リ矢原ノ叔父ハ書狀遲着セシコト、我ハ  
 途中彼家ヲ見舞ヒシコトヲ語ゲケレバ此家一同ハ始メテ  
 眉ヲ開キタリ、來集セル遠近ノ親族ハ皆出デ、新來ノ客ヲ  
 勞セリ我ハ一々久濶ヲ謝シ其健康ヲ賀セリ、而シテ我父亦



來客中ノ一人タリシ、我ハ第一他人ヲ置テ父ノ容體ニ注意シタレドモ他ノ應對ヲ先ンゼザルベカラザレバ其終リタル後始メテ父ニ對シ病氣ノ快癒ヲ祝セリ、父ハ慈愛ナル性質ヲ温和ナル顔面ニ呈シテ我ヲ迎ヘ曰フ「汝早ク卒業歸家セヨ吾既ニ世ヲ厭ヘリ」ト父ハ眞率ニシテ他人ノ之ヲ聞クヲ憚ラズ又時機ヲ見ルノ才敏ナク、唯常ニ專心我ヲ待テルガ故ニ此卒然タル談話ヲ發シタルナリ、我亦常ニ此愛ヲ持セリ而シテ今稀ニ拜顔シ乃チ此語ヲ受ク豈感謝ニ堪ヘンヤ唯潸然トシテ禁ズル能ハザリヤナリ、父子ノ應對益深奧ニ入り一坐之ガ爲メニ肅然トシテ數多ノ視線皆我兩人ノ上ニ集合セリ、此家ノ主人ナル叔父ハ之ニ堪ヘズシテ父ニ向テ談話ノ中止ヲ請フ父ハ驚キ起チテ一同ノ酒席ニ就ケ

リ我ハ直チニ新シキ叔母(叔父ノ妻)ノ云フニ應ジ即衣ヲ改メ又久シク與ラザリシ宴席ニ侍シテ親戚團欒杯ヲ傾ケタリシハ一段ノ愉快ヲ感シタリ、安ンズル能ハザルモノハ故郷ニ在ル母及弟ノ我ヲ待ツコトナリ、ザレバ此日ノ宿泊ヲ辞シ父ト共ニ歸郷センコトヲ乞ヒタレトモ叔父母之ヲ許サルガ爲メニ遂ニ宿セリ翌曉五時三十分夢醒メ、直チニ起テ衣ヲ改メントシテ一驚シ獨語シ又寢ニ就キ自ラ自ラヲ笑テ止マズ人ニ向テ談セントスレドモ側ニ人ナク且天未ダ明ケザレバ唯獨リ談シテ獨リ諾セシノミ此レ他事ニアラズ即就床シタル身未ダ既ニ歸リテ校舎ノ寢臺ヲ辭シ平座ノ寢床ニ在ルコトヲ覺悟セズ習ヒ性トナリ校舎ニ在リテ猶毎朝ノ用意ヲ爲サントシテ漸ク悟リ獨リ笑語セシ



ナリ、此物語ハ今朝一同ノ歡笑ヲ買ヒ得タリ、  
 明ツレバ廿六日省ミレバ昨朝出發歸途ニ就キタル全郷ノ  
 學友等ハ既ニ郷家ノ喜ビヲ得タルナラン、我ハ父ヲ此地ニ  
 拜ミタルモ未ダ母弟ヲ満足セシムル能ハズ、郷家ノ二人ハ  
 我ノ歸省ヲ待ツコト決シテ容易ナラズ、或ハ他人ノ歸裝ヲ  
 誤リテ失望シタラン、又他ノ喜ブ所ノ家人ヲ羨慕セルナラ  
 ン、今ハ出テ、門閭ニ待チツ、アラン、此等ノ想像ハ續々ト  
 シテ我ヲ刺衝スルガ故ニ在レ、無キガ如ク留マレ、身ハ  
 歸途ニ在ルガ如クナリシナリ、然ルニ復近隣ナル一親戚即  
 母妹ノ嫁セル所ノ家ニ於テモ昨夜既ニ案内トシテ母妹ノ  
 歸ナル我叔父來招シタリシモ我ハ疲勞ノ爲ニ辭シタルヲ  
 以テ今朝ハ必ズ來ルベシト要シケレバ之ヲ辭スルコト能

ハズシテ行キ亦歸省ノ時期ヲシテ遲延セシメ郷家二人ノ  
 痛苦ヲシテ増サシメタリ我ハ父ト共ニ此家ノ懇饗ヲ受ケ  
 父ハ我ヲ得テ愉快ノ度ヲ高ウシ從テ此家ヲ辭スルニ意ナ  
 キガ如クナルヲ以テ我ハ堪へ得ズ遂ニ父ニ向テ謝シテ吾  
 情ヲ告ゲケレバ父亦吾請ニ應シテ即辭シテ歸途ニ就ケリ、  
 時ニ午前十時ナリ、足痛ミ而シテ痛苦ヲ覺エザルモノハ父  
 有ルヲ以テナリ、行程長シ而シテ其長キヲ覺エザルモノハ  
 父有ルヲ以テナリ、行程ノ初ニ於テ父ノ勸メヲ辭シテ乘車  
 セザルハ我ノ決意スル所アレバナリ我父ニ向テ之ヲ強ヒ  
 タレ、亦肯ンセザルニ至リタルハ我有ルガ故ナラン、其長  
 途ノ徒歩ニ難セザルモ亦我ノ有ルガ故ナラン、我ハ父ノ猶  
 能ク歩シ得ルヲ喜ビ又彼ノ松柏ノ漸ク枯レントスルヲ見



テ憂ヘ行々其後貌ヲ拜シ暗涙數行下テ止マズ即丹誠ヲ以テ天ニ請ヘリ曰ク天ヨ願クハ我ヲ憫ミ暫ラク我父ヲシテ長壽ナラシメヨト

行クコト十數町ニシテ柏崎ニ到リ夫ヨリ免地ヲ經テ嘉川ニ着ス行程合シテ一里ナリ此市街ヲ過ギ中野高根ノ市街ヲ通過シ此ヨリ迂折シテ村落トナル第一ノ村落タル原條ヲ過ギ吾教證寺ノ前路ヲ横ギリテ佐山ニ着ス行程嘉川ヨリ亦一里ナリ此村落ニハ吾家祖父及實父ノ生家タル一親戚アリケレバ之ヲ訪問シ行クコト數町ニシテ佐山村落ノ人家絶エ前面ハ廣漠タル田野ニシテ田野ノ極マル所ニ於テ遙ニ人煙ヲ望ムハ即我故郷ナリ

第五 吾郷

野外罕人事。

白日掩柴扉。

時復墟曲中。

相見無雜言。

桑麻日既長。

常恐雪霰至。

窮巷寡輪鞅。

虛室絕塵想。

披草共來往。

只道桑麻長。

我土日既廣。

漂落同艸莽。

西ハ方便一帯ノ支山脉屏風ヲ樹ツルガ如ク連亘重疊シテ長門國界ヲナシ東南北ノ三面ハ渺タル一帯ノ田野ヲ以テ圍繞セラレ人家百ニ足ラザレモ自ラ一ノ樂土タルヲ表ハスモノハコレ我郷ナリ西方山脉ハ南北ニ連綿シ東西ニ重疊シテ吾村落ノ一大寶庫タリ渠ハ又天氣ノ變化ヲ山色ニ示シ凡テ此小世界ニ空際ノ革命アル毎ニ先ツ若干ノ異狀



ヲ其遠觀ニ示セリ故ニ古來郷人ハ之ヲ以テ天氣豫報トナシ、今猶村婦ノ爲メニ好晴雨計トシテ眺望セラル、ナリ  
 渠ハ時ニ岩石ノ如キ立雲ヲ載積シテ夕立ノ近ツクヲ告ゲ  
 晴天ニハ一抹ノ暗粉ヲ帶ビテ後刻ノ曇ナルヲ豫言セリ秋  
 季ノ薄暮ニ於テ夕紅ヲ呈スルカ或ハ乾燥セル積翠蒸騰セ  
 ル紫嵐ヲ浮ブル時ハ其明日ハ常ニ晴タリ、若シ其屏風ノ一  
 方ニ異狀ナクシテ他ノ一方急ニ暗黒トナル時ハ鳥ハ遠近  
 ノ野ニ足蹈ヲ速メ刈者ハ磨鎌ノ暇ナク、結者ハ束ヲ投シテ  
 各四散シタル後ニ於テ常ニ油然トシテ驟雨降下スルナリ、  
 今我遙ニ新シキ眺望ヲ以テ之ヲ訪フニ敢テ異常ナキガ如  
 ク唯漸ク老衰ノ態ヲ表白スルノミ  
 我此茫茫タル野色ノ暮ニ於テ唐徒ノ如ク「山氣日夕佳」ナル

ノ時ニ悠然望西山ノ客タリシハ一春秋ニ非ズ且我幼少ノ  
 時ニ於テ村落ノ祝日ノ一ナル春暖三月ノ節句ニ當リ一郷  
 全胞ト共ニ辨當ヲ腰ニシテ登山セシハ彼一峯ニシテ今猶  
 郷兒ノ爲メニ此宴席トナリ我ハ既ニ久シク之ヲ訪フコト  
 能ハザリシト雖モ今ハ吾弟ノ世トナリ其交誼我幼少ノ時  
 ト異ナラズ彼ハ千歳其節ヲ違ヘズ終始其職ヲ變移セズシ  
 テ漸ク將ニ老耄セントス我暗ニ惘然タラズンバアラザル  
 ナリ  
 我郷人ノ眼ハ妄念ノ花ニ迷惑セズ其呼吸ハ都人ノ銅臭ナ  
 ク其言語ハ名譽ノ氣息ヲ吐カズ嫉妬怨恨其胸中ヲ犯侵セ  
 ズ渠等ノ皴ハ好笑ノ爲メニ嵩マリ其鬚髮ハ雨雪ノ爲メニ  
 白ケレモ兒女ノ生育ノ外ニ憂苦ナク一杯ノ夜酒ノ外希望



ナシ而シテ兒女ヲ殘遺シテ現世ヲ去辭シ、墓碣ヲ得テ斯世ニ殘留ス其生活ハ安全ナル一場ノ夢ノ如ク其生命ハ平和ノ日ト平和ノ夜トノ長連鎖ナリ

渠等ハ其種ヲ地ニ置キ其牛馬ヲ地ニ曳キ其犁鋤ヲ地ニ立テ其兩足ヲ地ニ着ス網繩磨鎌ハ其最モ微々タル業ナリト雖モ、凡テノ事業ハ曾テ地ヲ離ル、コトナシ即チ天ノ力地ニ在ルナリ、而シテ其爲ス所ハ唯耕焉種焉アルノミ耕シテ蒔種シ其以後ヲ至上者ニ任シ安然トシテ其成長ト果熟ヲ待ツナリ、朝ハ夕ニ代リ、夜ハ晝ニ轉シ春回リ夏來リ秋立チ冬亦暮ル温風熱氣冷吹寒息順次シテ更迭スル間ニ於テ其果穀生熟シ亦各其時ニ從ヘリ渠等ハ唯刈リテ粉トナシ其美産ヲ炊キテ之ヲ食フノミ又何ノ積不平アラシヤ

西方ノ寶庫ハ太古ヨリ我郷ノ爲ノニ使用セラレ其材木薪柴ハ斧斤時ヲ以テ山林ニ入ラズト雖モ勝テ用フベカラズ泉ハ其溪間ニ湧出シ其岩中ニ存在シ數所ノ窪地ハ水ヲ貯溜シテ池湖ヲ爲シ細河ハ數條トナリテ郊野ニ此等ノ水ヲ分布シテ野獸飲シ林鳥浴シ江魚之ニヨリテ養ハル、モ又灌溉ノ料トナスニ足ルナリ畎隴ノ青草ハ流水ト潤氣ヲ追フテ生シ茅葦ハ池塘ニ戰ギ、蘆荻ハ江渚ニ蕃生シ、浮萍ハ波間ニ游漂ス、故ニ野獸之ヲ食ヒ、林鳥ノミ、江魚亦之ニ因リテ生ヲ保ツト雖モ又牛馬ノ食トナスニ足ルナリ

吾郷ニハ蜀江ノ錦ナシト雖又自然ノ美色ヲ野郊ニ陳列シテ郷人ノ眼ニ饜ゼズンバアラズ桃ノ花ハ眞紅ノ如ク、薰シ櫻花ハ淡紅タリ、梅花ハ淨白ニシテ、李花ハ天白ナリ、菜種ノ



花ハ圃園ニ黄色ヲ姿ニシ、豆花ハ紫ヲ呈ス、此岸ニ綠翠タル  
 楊柳アリ、彼山端ニ紅葉照映ス、七草ハ春秋兩度ニ於テ野外  
 ヲ裝飾シ、春霞ハ連山ヲ組織ノ蚊帳ニ變シ、秋氣ハ諸峯ヲ密  
 畫ノ屏風ノ如ク列セリ、曉來玉散スル明露ハ宛モ宵星天ヨ  
 リ落チテ地ニ點スルガ如ク、遠林ノ白雪ハ黃落ノ後華ニ似  
 タリ、又何ツ憾ミンヤ  
 渠等ハ又邯鄲ノ音樂ナキヲ恥ヂザルナリ、雲間ノ雲雀ハ天  
 上ノ福音ヲ傳フル天女ノ如ク、囀上囀下シ、黃鸝ハ谿間ノ花  
 ニ歌舞シ、子規ハ山路ノ夕暮ニ啼鳴セリ、繞軒ノ雨滴ハ絃歌  
 ニ優リテ長夜ノ衣トナリ、埒ニ於ケル鷄鳴ハ寢覺ノ感戰場  
 ノ喇叭ニ優リ、風聲鶴唳皆我里太平無事ナル音調アリ、且ツ  
 樵子ハ角笛ヲ吹キ、牧兒ハ牧笛ヲ吹鳴ス、豈誰カ人工ヲ欲ス

ノ暇アヌンヤ

四ヶ月已前我此愛スベキ吾郷ヲ辞シテ以來如何ナル變態  
 アリシヤトハ今足ヲ門閭ニ踏入セントスル時ニ於テノ第  
 一疑問ナリ、而シテ自然ハ明ニ之ニ答ヘリ、抑我ノ出郷セシ  
 時ニ當テヤ西山ノ松柏ハ瑞々トシテ氣勢昂ク、彼ノ神林此  
 ノ庭園ノ萬綠翠然トシテ鬱叢シ、渺茫タル三面ノ大洋ハ青  
 波ヲ漲ラシ、鄉黨ハ相和シテ豐歲ヲ祝シタリシガ今ヤ夏去  
 リ秋過キ冬時亦既ニ來リテ昨ノ景今既ニ存セズ、悲ンデ遙  
 ニ回顧スレバ西山夙ニ瘦骨ヲ呈シ萬綠已ニ褪シテ灰色ト  
 ナリ、翠葉枝朶ヲ離レテ裸幹骨立シ、郷土ヲ拂フテ西山ニ収  
 マルヘキ嵐ハ悄然トシテ枯葉ヲ地上ニ散ラシ、裸幹ヲ山林  
 ニ洗滌シ、人畜ヲ戰慄セシム、田面一樣ノ青波ハ其盛時ヲ經



テ僅ニ寂寞タル斑點ヲ羅列スルヲ見ルノミ、門閭ノ家犬亦老衰シテ吾異態ヲ咎ザルナリ吾ヲ迎ヘ吾ニ答フル所斯ノ如シ我豈一片ノ感慨ナカランヤ

吁吾郷衰頽ス我獨リ老イザルノ理ナシ、郷影ハ郡我ノ好反射鏡ナリ、自ラ我ヲ見ル能ハザルモ蓋シ昨年ノ今日ヨリ一歲時ヲ重ネタルコト明ニシテ少年ノ綠翠亦一歲ノ衰枯ヲ生シタルヤ疑ナシ、而シテ其老枯我レノミニアラズ、父母衰ヘ、親戚郷黨亦然ルナリ、父小郡ニ於テ我ニ要求シタルハ其老衰ノ証績ナルベシ、嗚呼我未ダ業成ラズ、未ダ歸郷シテ吾郷ヲ愛シ吾郷ニ事フルコト能ハズ、吾郷ノ老イル何ゾ早キノ甚シキヤ「吾郷ノ神ヨ我ヲ捨ツルコトナク業ヲ終ヘテ歸ルヲ待テヨ」

閭ニ入り行々郷隣ノ變態ヲ窺フニ或ハ家屋ノ新築セルアリ父ニ問フテ故友某ノ刻苦精業ノ結果ナルコトヲ聞テ羨慕ニ堪ヘズ更ニ其平時ノ孝養言行ヲ聽キ之ヲ訪問セント欲スルノ意ヲ急ニセリ、或ハ嘗テ異裝珍客ヲ怪ンデ傍觀セシ兒女新ニ整姿禮容ヲ設ケテ我ヲ迎フニ遇フ、蓋シ渠等ハ前日ノ阿蒙ニ非ズシテ小學校兒童トナリ教師ノ薰陶教化ノ下ニ生活スレバナリ宜ナル哉 聖澤草野ニ浴及シ文化邊陲ニ達シタル所以ニシテ又教師ノ授業高尙ニシテ此結果ヲ致スニアラザランヤ

### 第六 吾家

方宅十餘畝。

草屋八九間。



榆柳蔭<sub>ニ</sub>後園<sub>一</sub>

犬吠<sub>ニ</sub>深巷<sub>一</sub>中。

戶底無<sub>ニ</sub>塵雜<sub>一</sub>。

混<sub>ス</sub>跡<sub>ヲ</sub>紅塵<sub>ノ</sub>潏<sub>ノ</sub>中。

五更夢覺<sub>ノ</sub>書窓<sub>ノ</sub>下。

桃李羅<sub>ス</sub>堂<sub>ノ</sub>前<sub>ニ</sub>

鷄鳴<sub>ノ</sub>草樹<sub>ノ</sub>巔<sub>ニ</sub>

虛室有<sub>ニ</sub>餘閑<sub>一</sub>。

歸來今夜故<sub>ノ</sub>山東<sub>ニ</sub>。

不<sub>レ</sub>聽<sub>ニ</sub>車聲<sub>ヲ</sub>聽<sub>ニ</sub>竹風<sub>ヲ</sub>。

吾郷戸數七十餘、前後兩區ニ分レ前區ハ高燥ナル一丘地ニシテ後區ハ平低ナリ、而シテ吾家ハ此前區ノ中央ニアレバ遠望最モ觀易キ位地ヲ占ムル故ニ今歸省ノ途ニ在ル我ニ於テ其觀恰モ望遠鏡ヲ加ヘタルガ如ク確然タル燒點ヲ作レリ、我ハ泣ケリ彼ノ高地ノ中央ニ生籬東西ニ連續シ所々斷絶シ而シテ嘗テ久シク剪伐ヲ施サザルガ故ニ枝朶自由ニ生長シ藪林其内部ニ孤立シテ僅ニ故態ヲ存シ斷籬ノ間

隙ヨリ幾ニ黒點ヲ帶ビタル白堊ト草屋ノ數棟ヲ臨ムベク中間ノ地面積十餘畝茫トシテ禾黍油々タリ麥秀テ、漸漸タラントシ人ヲシテ箕子ノ歎ヲ回想セシムルモノハ抑何人ノ樓所ナリヤ最愛ナル兩親ト弟トハ常ニ彼ノ荒境ニ沈淪シテ其不遇ヲ歎ズルコト幾何ナリヤ而シテ我有リ之ヲ挽回シ昔我ヲ掌中ノ寶玉トシテ撫愛セシ祖父及我ヲ鞠シ我ヲ抱負シ飲食惟レ忘レタル祖母ヲ地下ニ安ンジ父母ヲ現在ニ慰籍スルコト嘗テ能ハズ吁我ノ罪至大謝スルニ辭ナク何ノ顔色アツテ吾家ニ對セント玆ニ於テ足進マント欲シテ進マズ進マザラント欲シテ而シテ進ム我已ニ罪多シ然レドモ父ハ樂シデ我ヲ容レ母ハ歡喜シテ待チ弟ハ專心兄ヲ呼ベリ遙ニ見ル彼ノ籬下ニ佇立シテ吾方ヲ瞻視スル



ノ幼兒アリ忽チ後方ヲ願ミ呼ベリコレ愛弟ノ吾歸郷ヲ痛  
 思シ屢々出デ、眺望ニ勞シ今漸ク我影ヲ得テ奮喜シ以テ  
 母ニ告ゲタルナリ、我之ヲ認識シタル時潛然トシテ歩行ノ  
 如何ニ急迫セルヲ覺エズ又父ノ緩行ヲシテ如何ニ急進セ  
 シメタルヲ知ラザルナリ、漸ク前區ニ着セシ時果シテ一人  
 ノ弟ハ滿面ノ笑容ヲ以テ禮シテ父兄ヲ歡迎シ、我携フル所  
 ノ荷物ヲ乞ヒ意氣揚々トシテ先驅シ祖先ノ遺家ニ向ヘリ  
 一行即父子三人遂ニ吾邸前ノ坂路ヲ上レバ母ハ門前ニ出  
 テ之ヲ迎ヘ我ノ健全ヲ喜ベリ我ハ漸ク唯今歸省セリトイ  
 フ數語ノ外又謂フ能ハズ漸クニシテ住家ノ新シク葺キ改  
 メタルヲ見テ嘗テ夢ミタルコトノ能ク符合スルノ一物語  
 ヲナス、母曰フ「吾レ父ニ勸メ卿ノ歸省セザル内早ク家屋ヲ

修繕シ前後ノ墻亦新ニ造作セント欲シタレドモ多忙ノ爲  
 メ充分ナラズ遺憾ナリト雖モ斯ノ如キ有様ナリト我ハ此  
 語ヲ聞カザル前ニ於テ既ニ母ト弟トヲ見テ感喜ニ堪ヘザ  
 リシニ今又斷腸スベキ此語ヲ聽キ一語ノ答フル所ヲ知ラ  
 ズ唯涙ヲ飲デ其改葺ノ清麗ナルヲ稱シ、驚テ二人ノ健康ヲ  
 祝シ又父ノ病氣全快ヲ賀シ母弟ノ辛勞ヲ謝シタリ、弟ハ吾  
 前ニ跪キテ過日ノ贈物ヲ謝シケレバ父母亦之ニ和シテ我  
 ヲ賞セリ、我ハ荷包ヲ解キ鉛筆、石筆、大筆及外部ノ一包ヲ出  
 シテ之ヲ與ヘ只渠ノ自由ニ任シタルニ渠ハ家庭ニ於テ訓  
 養セラレタル戴キノ禮ト學校ニ於テ學ビタル拜禮ヲ順序  
 ニ行ヒ天真ノ喜顔ヲ以テ之ヲ受ケ悉ク側ニ在ル母ニ預ケ  
 タリ、我ハ喜ブ渠ノ體壯健ニシテ且若干ノ生長ヲナシ、父母



ノ善性ヲ繼承シテ今ヤ禮ヲ學ビ得タルヲ見タレバナリ、  
 此日ヨリ種々ノ談話ハ絶ユルコトナク時ニ絶ユト雖モ、食  
 時ニ於テ又始マリ時ノ移ルヲ知ラズ其座ニ在リテ過去ノ  
 歴史、世俗萬般ノ活事談時ニ應シテ起リ常ニ他人ノ訪問ニ  
 驚キ始メテ食卓ヲ去ルコト例トナリタリ、我初メ豫期スル  
 所アリ即歸省セバ書簡ノ遺漏ヲ補ヒ三泊行軍演習及新築  
 落成式ノ詳細ヲ語ラント今ヤ反テ父母ノ家事ト郷事トヲ  
 談ズルコト又弟ノ兒戲談學校談ヲ聽クコトニ於テ時猶足  
 ラズシテ幾多ノ感慨絡繹トシテ我ヲ刺衝スルノミナリ

第七 郷黨

又是西疇及有事一夫與妻兒在家稀

每曉夙起戴星出イテヲ 盡日力作蹈月歸シテ  
 老翁春後猶作履ヲ 少女炊餘且上機ニ  
 紙衾藁蓆緣忍凍ヲ 菜羹麥飯漸充饑ニ  
 常憂私債迫促急ナルヲ 又恐公租納期遠ナリ  
 都人不知田舍苦ヲ 漫醉芳醇飲鮮肥ニ  
 故郷ニハ我慰藉ヲ思ヒ村落ニハ我平和ヲ期セリ、慈愛、友誼、  
 恩惠深切、歡情等人間ノ美德ト稱スルモノハ村落ノ外何處  
 ニ求メンヤ、帝堯ノ前ニ擊壤歌腹シタル父老ヨ帝堯ノ天下  
 ヲ辭シタル許由ヨ我ハ亦爾ニ與スルナリ  
 我ハ先ツ近隣郷黨ヲ訪ヒ其無事ヲ祝シ且不在中ノ厚誼ヲ  
 謝セリ、渠等ハ相和スルガ如ク皆我ヲ見我ヲ壯容ヲ賞シテ  
 之ヲ祝セリ、由テ喜ブ果シテ渠等ノ言ノ如ク壯勢壯健ナラ



ンニハ父母ニ對シテ得難キ土産ノ一トナルヲ、此ヨリ我  
 ヲ訪ヒ父母ヲ訪フテ我ノ歸家ヲ喜ブノ情ヲ述ブルモノ續  
 ヲトシテ斷エズ老男老女ハ父母ノ喜悅ヲ贊シ、郷朋ハ久濶  
 ノ情ト渠等ノ各境遇ニ於ケル談話トヲ以テシ日猶足ラズ  
 我ハ甚々之ヲ聞クコトヲ喜ビ之ヲ迎フルコトヲ樂ミ又老  
 者ノ訪ニ對シテハ、殊ニ懇勸ヲ盡シテ之ヲ慰勞スルニ務メ  
 ダルナリ  
 今日ハ訪ハレ明日ハ訪ヒ晝ハ訪ヒ夜ハ訪レテ寸暇ナシ初  
 メ歸省セントスル時ニ當テヤ此書ヲ讀ミ彼學科ヲ研究シ  
 或事實ヲ講究セント期シ重荷タルノ難ヲ厭ハズ肩ト足ニ  
 謝シテ數多ノ書籍ヲ携ヘタリシガ此豫算ハ夙ニ違キテ一  
 冊ヲ繕カズ一事ヲ研究セズ束荷依然トシテ室ノ一隅ニ在

ルノミナルヲ久シ然レドモ猶寸暇ヲ偷ンデ讀書セザルヲ  
 得ザレバ時ニ或ハ深宵ヲ論ゼズ或ハ少時ヲ忽ニセズシテ  
 机ニ倚ルコトアリ之ガ爲メ郷黨ヲ訪フコト亦淺薄トナリ、  
 父母ハ我ヲ促シテ遊歩ト安樂ヲ勸メ郷黨ハ薄情ヲ怪ムニ  
 至レリ故ニ我ハ陰ニ謝セリ學生間ノ無禮幸ニ許容セヨコ  
 レ他日禮セントスル所以ナリト  
 歸省ノ第一日ハ近隣ナル吾生家ヲ訪フテ一同ノ安全ヲ賀  
 セリ此家ノ主人ハ吾兄ノ一人ニシテ吾實父母ハ即此家ニ  
 在リ父ハ齡既ニ七十ヲ過ギ母ハ六十ヲ將ニ超エントス今  
 猶共ニ矍鑠トシテ威風ヲ損セズ我ノ歸告スルヲ見テ微笑  
 ヲ皺間ニ浮ベテ之ヲ迎ヘタリ我ハ兩體ノ健全ヲ祝シ又我  
 ノ壯健ヲ報シタリ渠等ハ又仲子ナル我兄ノ遠征ノ途ニ在



ルモノ將ニ歸省セントスルヲ待ツアリ此兒ハ最モ渠等ノ  
 老後ノ慰籍ヲ與フルモノナレバナリ此兒年齡二十五歲諸  
 兒中最モ嚴父慈母ノ教訓ヲ守リテ夙ニ士官學校ニ入り今  
 ヤ第四師團騎兵中尉トシテ彼地ニ妻子ヲ有シ而シテ身軍  
 職ニ在リト雖モ常ニ孝道ヲ怠ラザレバ最父母ノ意ヲ満足  
 セシメ得ルナリ故ニ父ハ我ニ問フニ先ツ此等ノ歸朝如何  
 ヲ以テセリ我ハ直ニ答ヘリ金州凱旋軍續々歸朝スル旨新  
 聞紙上ノ如クナレバ日ナラズシテ歸省スルナラント夫ヨ  
 リ父ノ示ス所ノ金州ノ來翰ヲ披讀シ父ト共ニ彼等ノ義烈  
 ヲ稱シ又獨リ兒ノ忠孝兩全ニ感激セリニ我ハ謝セリ我  
 業ヲ卒ヘテ獨立スルコト猶一年有半ナリ願クハ益々保養  
 ヲ厚フシ我ハ吾家ヲ恢復スルヲ待チ玉ハンコトヲト父ハ

曰ヘリ汝ノ學ゾ所僅ニ二ケ年四月ナリ若シ得ベクンバ四  
 ケ年ノ修業ヲ成シ得バ幸甚ナラント我之ヲ聞キ始メ驚キ  
 終リ喜ブ夫レ我素ヨリ正當ニ四年ノ學修ヲ欲スルモ或ハ  
 父ヤ待マン母ヤ屈指センコトヲ憂慮セリ然ルニ最老ニシ  
 テ命期久シカラザル父ニシテ克ク此語ヲ爲ス我豈奮起セ  
 ザランヤ感慨セザランヤ茲ニ再ビ謝セリ我不肖ニシテ嚴  
 父ニ背キ素志挫折シ年齡已ニ長ズルモ未ダ一業ヲ成サズ  
 シテ荏苒今日ニ至ル之ヲ思フ毎ニ戰慄限リナシ然レドモ  
 今幸ニ彼校ニ入り朝夕嚴正ナル薰陶ノ下ニ生息セリ將ニ  
 徳性ヲ養ヒ學業ヲ修メテ國家ノ一事業ニ與スルコトヲ得  
 ベシ我慎デ之ヲ勉メント父漸ク首肯セリ  
 其時鄉黨ノ主人タル徳望ヲ負ヘル某家ハ老翁ヲ訪ヘリ翁



喜<sup>レ</sup>我<sup>ヲ</sup>酒<sup>席</sup>ニ<sup>饗</sup>シ<sup>テ</sup>脆<sup>淚</sup>ヲ<sup>垂</sup>レ<sup>我</sup>ヲ<sup>撫</sup>ス<sup>ル</sup>コ<sup>ト</sup>子<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>  
 セ<sup>リ</sup>我<sup>ハ</sup>嘗<sup>テ</sup>吾<sup>在</sup>郷<sup>ノ</sup>時<sup>祖</sup>先<sup>ノ</sup>邸<sup>宅</sup>ヲ<sup>購</sup>復<sup>セ</sup>シ<sup>際</sup>ノ<sup>助</sup>力<sup>ヲ</sup>  
 謝<sup>シ</sup>且<sup>不</sup>在<sup>中</sup>ノ<sup>眷</sup>顧<sup>ヲ</sup>謝<sup>セ</sup>リ<sup>翁</sup>ハ<sup>懇</sup>切<sup>酒</sup>ヲ<sup>勸</sup>メ<sup>我</sup>ノ<sup>辭</sup>  
 ス<sup>ル</sup>ヲ<sup>許</sup>サ<sup>ズ</sup>而<sup>シ</sup>テ<sup>謂</sup>テ<sup>曰</sup>ク<sup>卿</sup>ノ<sup>家</sup>ニ<sup>連</sup>レ<sup>行</sup>キ<sup>シ</sup>ト<sup>今</sup>ハ<sup>等</sup>  
 夫<sup>妻</sup>直<sup>チ</sup>ニ<sup>襦</sup>褌<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>抱<sup>懷</sup>シ<sup>〇</sup>〇<sup>家</sup>ニ<sup>連</sup>レ<sup>行</sup>キ<sup>シ</sup>ト<sup>今</sup>ハ<sup>等</sup>  
 昔<sup>ト</sup>ナ<sup>リ</sup>タ<sup>リ</sup>鳴<sup>呼</sup>盛<sup>衰</sup>ハ<sup>現</sup>世<sup>ノ</sup>常<sup>理</sup>物<sup>盛</sup>ン<sup>ナ</sup>レ<sup>バ</sup>必<sup>衰</sup>フ<sup>〇</sup>  
 抑<sup>祖</sup>父<sup>母</sup>父<sup>母</sup>ノ<sup>慈</sup>善<sup>一</sup>郷<sup>ニ</sup>聞<sup>エ</sup>名<sup>望</sup>盛<sup>ナ</sup>リ<sup>シ</sup>ハ<sup>實</sup>ニ<sup>我</sup>等<sup>一</sup>  
 〇<sup>於</sup>テ<sup>衰</sup>世<sup>ト</sup>ナ<sup>リ</sup>遂<sup>ニ</sup>今<sup>日</sup>ノ<sup>衰</sup>運<sup>ト</sup>ナ<sup>リ</sup>シ<sup>ハ</sup>實<sup>ニ</sup>我<sup>等</sup>一<sup>〇</sup>  
 郷<sup>ノ</sup>共<sup>ニ</sup>憫<sup>然</sup>タル<sup>所</sup>ナ<sup>リ</sup>卿<sup>ヨ</sup>願<sup>ク</sup>ハ<sup>益</sup>々<sup>奮</sup>テ<sup>興</sup>復<sup>ヲ</sup>計<sup>レ</sup>  
 ヲ<sup>我</sup>等<sup>老</sup>イ<sup>テ</sup>余<sup>日</sup>ナ<sup>シ</sup>ト<sup>雖</sup>モ<sup>其</sup>余<sup>生</sup>ヲ<sup>樂</sup>ム<sup>所</sup>以<sup>ハ</sup>モ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
 卿<sup>ガ</sup>再<sup>ビ</sup>興<sup>家</sup>ノ<sup>期</sup>ヲ<sup>俟</sup>ツ<sup>ノ</sup>ミ<sup>ナ</sup>リ<sup>ト</sup>我<sup>恐</sup>懼<sup>感</sup>激<sup>答</sup>フル<sup>所</sup>  
 ヲ<sup>知</sup>ラ<sup>ズ</sup>慨<sup>然</sup>タル<sup>コ</sup>ト<sup>久</sup>シ<sup>ク</sup>僅<sup>ニ</sup>曰<sup>ヘ</sup>リ<sup>鴻</sup>恩<sup>ノ</sup>阿<sup>翁</sup>ヨ<sup>我</sup>

未<sup>ダ</sup>孝<sup>セ</sup>ズ<sup>報</sup>恩<sup>セ</sup>ザ<sup>ル</sup>ハ<sup>最</sup>モ<sup>慚</sup>愧<sup>ニ</sup>堪<sup>ヘ</sup>ザ<sup>ル</sup>所<sup>ナ</sup>リ<sup>我</sup>常<sup>ニ</sup>  
 郷<sup>家</sup>ヲ<sup>忘</sup>レ<sup>ズ</sup>之<sup>ヲ</sup>憶<sup>フ</sup>毎<sup>ニ</sup>未<sup>ダ</sup>嘗<sup>テ</sup>潜<sup>然</sup>タ<sup>ラ</sup>ザ<sup>ル</sup>ナ<sup>シ</sup>  
 故<sup>ニ</sup>今<sup>彼</sup>校<sup>ニ</sup>入<sup>學</sup>セ<sup>シ</sup>以<sup>來</sup>聊<sup>期</sup>ス<sup>ル</sup>所<sup>ア</sup>リ<sup>只</sup>憾<sup>ム</sup>ラ<sup>ク</sup>ハ<sup>志</sup>  
 業<sup>礎</sup>陀<sup>シ</sup>テ<sup>年</sup>齡<sup>既</sup>ニ<sup>人</sup>ニ<sup>超</sup>エ<sup>精</sup>神<sup>新</sup>純<sup>ナ</sup>ラ<sup>ザ</sup>ル<sup>ガ</sup>爲<sup>ニ</sup>  
 學<sup>ブ</sup>所<sup>活</sup>潑<sup>ナ</sup>ラ<sup>ズ</sup>シ<sup>テ</sup>又<sup>上</sup>達<sup>ス</sup>ル<sup>能</sup>ハ<sup>ズ</sup>然<sup>レ</sup>モ<sup>又</sup>我<sup>ノ</sup>能<sup>フ</sup>  
 べ<sup>キ</sup>ヲ<sup>度</sup>ト<sup>シ</sup>應<sup>ニ</sup>黽<sup>勉</sup>セ<sup>ン</sup>コ<sup>ト</sup>期<sup>ス</sup>ル<sup>ナ</sup>リ<sup>願</sup>ク<sup>ハ</sup>之<sup>ヲ</sup>  
 許<sup>セ</sup>ヨ<sup>ト</sup>  
 我<sup>郷</sup>ハ<sup>近</sup>時<sup>小</sup>學<sup>教</sup>師<sup>タル</sup>モ<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>人<sup>ハ</sup>吾<sup>區</sup>ヲ<sup>稱</sup>シ<sup>テ</sup>教<sup>師</sup>  
 ノ<sup>巢</sup>窟<sup>ナ</sup>リ<sup>ト</sup>稱<sup>セ</sup>リ<sup>故</sup>ニ<sup>吾</sup>友<sup>ト</sup>シ<sup>テ</sup>訪<sup>ヒ</sup>或<sup>ハ</sup>訪<sup>ハ</sup>ル<sup>モ</sup>  
 ノ<sup>又</sup>教<sup>師</sup>多<sup>ク</sup>其<sup>談</sup>ス<sup>ル</sup>所<sup>我</sup>ノ<sup>聽</sup>ク<sup>所</sup>教<sup>師</sup>生<sup>活</sup>ア<sup>リ</sup>甲<sup>ノ</sup>曰<sup>フ</sup>  
 所<sup>乙</sup>ノ<sup>慨</sup>ス<sup>ル</sup>處<sup>其</sup>軌<sup>ニ</sup>ナ<sup>ラ</sup>ズ<sup>是</sup>等<sup>ハ</sup>既<sup>ニ</sup>己<sup>レ</sup>ノ<sup>業</sup>ヲ<sup>終</sup>  
 へ<sup>テ</sup>新<sup>ニ</sup>愉<sup>快</sup>ナル<sup>重</sup>任<sup>ヲ</sup>負<sup>ヒ</sup>其<sup>學</sup>ベ<sup>ル</sup>所<sup>ヲ</sup>實<sup>地</sup>ニ<sup>經</sup>驗<sup>踐</sup>



行スルノ境遇ニアルモノナレバ其談ノ我ヲ益シ我ヲ感悟  
 セシメタルモノ決シテ尠少ニアラザリシナリ  
 我ハ又時ニ村長ヲ訪ヒテ其學事談ヲ聞キ二三ノ小學校長  
 ヲ訪フテ其懇切ナル教育談ヲ聞ケリ就中曩ニ此校長等ノ  
 一人委員ノ一ニ在リテ開設セシ吉敷郡小學校教員總集會  
 ニ關スル前後ノ困難事情ヲ聞キタル時ニ於テハ主客拱手  
 シテ共ニ慨歎ノ外ナカリシ我ハ陰ニ覺悟セリ教育者ハ唯  
 ニ學識ノミニ倚ルベカラズ又宜シク地方ノ情勢ト宿弊ノ  
 存スル所ヲ察知シ以テ適當ノ措置ヲ施サレハ決シテ從  
 事スベキモノニ非ザルコトヲ即教育者ハ又外交ノ技倆ヲ  
 要スルコト大ニシテ我獨徳ヲ修メ天真ニ居ルヲ以テ足ル  
 トセバ國家ノ事業タル教育ヲシテ有効ナラシムルコトヲ

知レリ此他學校ノ内情教員ノ任免轉徙ハ多クシテ其ノ弊  
 害ノ在ル所紛雜極リナキヲ耳ニスルニ及ンデハ我ヲシテ  
 覺エズ此事業ヲ嫌忌セシメ彼ノ天真純正ナル修學生涯ヲ  
 脱シテ此俗世界ニ移リ其塵埃ニ惱殺セラルハ甚ダ恐怖  
 スベキヲ覺エシメ轉々感慨ニ堪ヘザリシナリ此時ニ於テ  
 ハ我ハ寸時モ此俗世界ニ逡巡スルヲ欲セズ急ニ復タ吾聖  
 郷ニ歸業センコトヲ切望スルニ至ラシメタリ

第八 新年

喔々鷄鳴曉藹然。早梅馥郁暗香傳。  
 天高鶴舞老松外。風暖雀喧疎竹邊。  
 閑處風流存故態。醉中顏色入新年。



朝來可識童兒喜。三五成群放紙鳶。

擔簦去歲出家鄉。校暇省親還草堂。

早見開春花信到。會朋半日酌杯觴。

鐘聲漸絕入新年。旭日瞳々上半天。

萬戶千門旗影麗。東隣西舍壽觴傳。

匹馬嘶風殘月斜。東山日出散朝霞。

前程難寫天然畫。一半垂楊一半花。

明治廿八年茲ニ暮レ將ニ廿九年ノ新正ヲ迎ヘントス、此時ニ當テ一家團樂屠蘇ヲ酌テ迎年スルハ又得易カラザル人世ノ一幸事ナリ而シテ我亦故山ニ歸省セリ然レトモ去年閉業式ノ際校長ノ命示セル所アレバ又元旦ニ於テ郷家ニ

在ル能ハザル境遇トナレルナリ即十二月三十一日午後郷家ヲ發シ本日小郡叔父ノ家ニ泊シ翌日午前六時拂曉霧ヲ拂フテ單鞋山口ニ向ヘリ時ニ天未ダ明カナラズ煙霧四塞シ冷氣身邊ヲ侵襲セリ而シテ其霧ハ昨ノ如ク深暗ナラズ其氣ハ冷ナレドモ舊ノ如ク人ヲシテ萎靡セシメザルナリ忽然トシテ轟震スル寺社ノ曉鐘ハ舊音ヲ留メズ哄然トシテ響應シ四方ノ山岳ハ之ガ爲ニ開關シテ巍峩タル新容ヲ呈シ枯樹萎葉既ニ地ニ埋マリテ綠翠萌生シ田家ノ疇ニハ時鳥ノ聲高ク東邊西陲相和シ都城ノ屋ニハ鳳鳥舞ヘリ行々天地ノ舊變化新ヲ眺望シ心氣爽快譬フルニ物ナシ楳野川ノ流水ハ滾々トシテ休マズ而シテ舊色已ニ消エテ清麗トナリ天ノ新正ニ應ゼリ天漸ク開明シテ清朗タルコト一



段又一點ノ際涯ナシ、各戸ノ旭旗ハ翩々トシテ新風ニ翻リ  
 照如トシテ新陽ノ光輝ヲ俟テリ、蓋シ本日ハ萬里全体萬物  
 舊態ヲ改メ乾坤茲ニ新正トナルベキノ日ナレバ天地和合  
 シ人物和協シテ之ヲ迎フルナリ、果セル哉。天祖天照彩然  
 トシテ我土ニ照臨シ威靈德澤宇内ニ洽及ヒリ嗚呼誰カ祝  
 セザランヤ誰カ賀セザランヤ、一家ハ内外ニ新旦ノ式事ヲ  
 盡シ供シテ年時ノ新正ヲ表シ一家團欒新裝祝舞ス而シテ、  
 子ハ親ヲ祝賀シ親ハ兒ヲ撫シ、故舊親戚朋友鄉黨互ニ相賀  
 シ、禽獸亦山野河海ノ棲所ニ歌舞シ地上ノ草木爲メニ鏽綉  
 ヲ裝ヘリ、景雲天ニ爛々トシテ人物下ニ縵々タリ  
 我ハ此滿腔ノ愉快ヲ以テ進ンデ旭旗ノ街和氣藹々タル城  
 市ヲ潜行シ而シテ先登第一ニ我等ノ聖郷タル學校ニ入り

マリシ時ハ身昂然トシテ高揚シ喜ハ未曾有ノ度ニ達シタ  
 ルナリ、午前十時講堂ニ於テ式始マレリ、愛スベキ附屬小學  
 校兒童及高等女學校生徒ト共ニ此堂ニ整列シ 聖壽ノ萬  
 歳ヲ奉祝シ新年ヲ讚美シタリ加フルニ敬愛ナル校長教員  
 ノ健康ニシテ萬福ナル迎年顔ヲ拜シ祝意ヲ表シタルハ吾  
 幸榮ノ最モ大ナルモノニシテ欣喜溢胸恰モ醉者ノ如クナ  
 リシ、唯憾ムラクハ此日學友ノ來場多カラザリシヲナリ、式  
 終ルヤ學友相携ヘテ師ノ邸ヲ回祝シタリ我等ノ此ヲナス  
 素ヨリ形式的虚飾ニアラズシテ丹誠以テ師者及其一族ヲ  
 祝壽センガ爲ナリ然ラズンバ何ゾ此一年再ビ得ベカラザ  
 ル最慶日ニ於テ一家團欒ノ快ヲ捨テ往復十余里ヲ苦ムコ  
 トヲセンヤ然レモ其堂ニ伏スルヲ得テ而シテ親シク我意



ヲ表スルコト能ハザルモノ多キハ無限ノ憾事ナリシナリ、  
 午後五時回禮ヲ終へ學友ト分袂シ我ハ此賑盛ナル都城ヲ  
 捨テ、疲勞且靴傷シタル瘦脚ニ身ヲ支へ辛フシテ小郡ニ  
 歸着シタリ時ニ元旦既ニ暮テ又歸ラズ、時計將ニ午後七時  
 ナラントセリ、翌朝ハ早曉ニ起チ郷ニ到着シ鄉黨親戚及知  
 己ヲ廻禮スルコトニ從事シ又其廻禮ヲ受クル爲ニ忙シク  
 此日ヨリ五日ニ至ル迄ハ新宴相繼ギ之ガ爲メ嘗テ在學中  
 一滴ノ酒ヲ近ケザルヘシトノ規定ハ計ラズ破綻シ自ラ自  
 ラヲ忘レ擊缶ノ父老ヲ學ビ老莊ノ風ニ處シテ草莽ノ臣等  
 聖德ニ洽濕シ德澤ニ沾潤シテ祝筵ノ間ニ自然ナル 聖壽  
 萬歲ノ奉祝ヲ終リタリ

第九 旅行

閑窓孤燭滅。  
 一杵山鐘度。

寂々入禪心。  
 燒香坐夜深。

溪環澗轉路成彎。  
 嵐氣濕衣雲意冷。

積翠四圍山擁山。  
 人行万仞斷崖間。

我短期ノ休暇加フルニ多事ナル時日ノ間ニ於テ年禮トシ  
 テ往復十餘里ノ旅行ヲ鴻城ニ費シタルノ外ハ意ノ如ク遊  
 行スルコト能ハズ唯西山ノ中腹ニアル祖先ノ靈地ニ詣行  
 シ且此山背ノ幽谷ヲ訪ヒタルコト及我郷ノ南方三十餘町  
 ニ鎮座セル吾産土八幡社ニ參詣シタルコトアリシノミ即  
 某日午後ヲ偷ミ弟ヲ伴ヒ墓參ノ途ニ就ケリ、我ハ花枝ト水  
 桶ヲ携へ弟ハ線香ヲ薫シツ、我前ヲ走レリ、靈地ハ吾家ヲ



去ル十餘町ノ山腹ニアリ、田徑迂路ヲ紆廻シテ山麓ニ著ス  
 レバ上下二條ノ泉流ハ凄然トシテ潺湲タリ、我等ヲシ冥郷  
 ニ入ルノ感ヲ與ヘ、又携フベキ靈墓ノ洗水ヲ供シケレバ即  
 之ヲ酌テ坂ヲ昇レリ我ハ心中ノ語ヲ以テ祖先ノ各靈ニ向  
 テ我等二子ノ來謁ヲ告ゲ夫ヨリ花ヲ樹テ洗水ヲ灑ギ香ヲ  
 供ヘテ禮拜ヲ終レリ、願ミレバ弟亦我ニ從テ眞實ノ禮ヲナ  
 セリ、渠ハ如何ナル愛撫スベキ思想ヲ以テ此禮ヲ執リタル  
 カヲ疑ヘバ其愛益々増加シタルナリ、我ハ渠ニ向テ彼ハ祖  
 父此ハ祖母ナリト悉ク其墓ヲ指教シ且死ニ事フルコトヲ  
 諭シテ渠ノ天真ヲ破レリ、嗚呼此兒ノ禮ヤ天地之ニ感シ祖  
 先ノ靈地下ニ於テ之ヲ饗ケタルナラン夫レ然ラザランヤ  
 遽ニ山溪ノ嗚咽ヲ感シ又我等ノ辭セントスル時願盼スレ

ハ一對ノ靈鳥墓石ノ頭ニ在リテ低鳴シタルナリ我ハ獨リ  
 舊時ヲ回想シ去ルニ忍ビズ落涙淋漓トシテ前後ヲ覺エザ  
 リシ

墓前無レ語惹餘哀ヲ 知否今朝我輩來ルヲ

老樹陰々人不見ヲ 怪禽鳴在古禪臺ニ

俯シテ前面ヲ眺ムレバ田面千里遠ク涉リ郷土ハ中央ニ突  
 起シテ宛モ海中ニ島アルガ如シ、我幼時之ヲ父老ニ聞ケリ  
 我郷ハ古昔海中ニ在ル小島地ニシテ廣曠タル田野ハ即海  
 底ナリ吾家ノ隣方ニアル神林ノ巨樹ニハ船ヲ繫シ東端ノ  
 明神崎ハ碇泊場ナリシト而シテ其際ニ於テハ人ハ僅ニ此  
 西山ノ麓ニ住居シタリト其海ナリシハ幾百千年ヲ經タル  
 太古ナリシヤ知ルベカラズト雖山麓叢林ノ古家及隣地巨



樹鬱蒼トシテ一神ヲ祭祈シタルコトハ確然我之ヲ知ル然  
 レトモ今既ニ古冢ノ跡ナク巨樹截伐シ森林ハ夷除シテ其  
 ニ麥秀漸々タルヲ見ルノミニシテ古形幻影トナレリ吁昔  
 ハ過ギ今來リ千變萬化限リナク昔偉大天ヲ衝クノ壯觀今  
 何クニカ在ル渺茫タル海水今何處ニ往ケリヤ天地變異シ  
 四時循環止ムナク世局ノ變遷亦皆烟ニ似テ昨是今非甚ダ  
 憐ムニ堪ヘタリ豈多少ノ感慨ナクシテ止マンヤ  
 靈地ヲ下リ河流ヲ溯リ山間幽谷ノ天然ヲ訪ハントス此地  
 俗ニ<sup>トウ</sup>動々<sup>トウ</sup>ト稱シ奇岩斷崖ノ間ニ溪水迂流シ其響雷ノ如ク  
 山岳ニ轟キ常ニ吾郷ヲ警制ス其名ハ蓋シ此響聲ヲ付シタ  
 ルモノナルベシ到ル處ノ水或ハ絶壁ニ懸リテ立チ或ハ竹  
 樹ノ間ニ臥シテ流レ或ハ深潭ニ坐シテ湛ヘ或ハ低ク瀨ヲ

走リ河リテ且流レ別レテハ亦委流ニ合ヒ急ナル後ニ暫ラ  
 ク緩ナリ蓋シ水ヲ移スモノハ石ナリ石ヲ變スルモノハ水  
 ナリ誰カ云フ流水無情巖石無命ナリト夫レ波上ノ白泡ハ  
 是レ岩石ノ實也石頭ノ碧苔ハ是レ流水ノ色也水石ノ契縁  
 何ツ永遠ナル山中ノ寂寞何ソ甚シキ其ノ聲ナルモノハ唯  
 禽獸草木ノ音ニシテ其象タルヤ唯茂林ノ積翠虚空ノ色ノ  
 ミナリ然シテ此深邃ナル谷間ニ於テ猶我ノ外來訪スルモ  
 ノアリ即負薪ノ樵夫時ニ往還スルナリ吁山高ク水長キ最  
 幽邃ナル此峽底ノ風情ヨ天地最モ悠久ナル此山中ノ景色  
 ヲ願クハ魚ニ生レテ此裡ノ主人タラン老子曰常無欲觀其  
 妙有欲觀其微ト我今水ニ於テ此語ノ至理ヲ解クヲ得タリ  
 蓋シ水靜カニ江湖ニ湛ヘテ無動無色無聲ノ狀態ヲ有スル



ニ當テハ、正ニ本來真如ノ面目所謂無欲ニシテ其妙ヲ觀ル  
 ノ時ナリ、忽焉トシテ溪門ヲ下リ、一海千里混々トシテ晝夜  
 ニ注ギ、蜺圓キ所ニ旋リ、岩石高キ處ニ折挫シ、瀨ヲ上リ、瀨ヲ  
 過ギ、淵ニ落チテ淵ヲ下リ、石ヲ懷キ石ヲ棄テ、變幻百態シテ  
 流行スルモノハ水ノ至動ナリ、其瀨ヲ下ルニ當リテハ、皓如  
 トシテ白羽ヨリモ白ク、麗乎トシテ白雪ヨリモ白ク、洒然ト  
 シテ白玉ヨリモ白ク、皦乎トシテ直チニ白日ノ白キニ擬シ、  
 其淵ニ湛フル時ニハ、空彩ヲ翡翠ニ寫シ、峰影ヲ屏風ニ疊ミ、  
 春花秋葉落日紅ヲ流レニ留ムルハ、水ノ色ナリ、崖ニ鳴リ、岩  
 ニ叫ビ、波ニ咽ビ、流ニ嘯リ、遠ク管ナキ笛ヲ吹キ、近ク絃ナキ  
 琴ヲ彈シ、宛モ谷神終夜ニ躍リテ清越ノ音滿溪ニ戰キ、天女  
 終日歌ヒテ波上ニ珠沫ヲ散スルモノハ、正ニ是レ水ノ聲ナ

リ、蓋シ無心ノ水ニシテ活如シ來レバ至動至色、至聲ヲ發シ、  
 動ケバ緩急ノ時ヲ得、色ニハ濃淡ノ影ヲ得、聲音ノ高下亦相  
 宜シキモノハ、欲アリテ其微ヲ觀ルノ時ナリ、妙活キテ微ト  
 ナリ、微藏シテ妙ニ歸シ、何等ノ痕迹ヲ留メザルモノハ、抑モ  
 亦如何ナル至理ナルヤ、是理固ヨリ悟リ難キニアラズ、然レ  
 凡試ミ之ヲ人事ニ求メヨ、孔子曰、喜怒哀樂未發謂之中、發皆  
 當節謂之和、ト而シテ、澆季今日ノ世ニ於テ中ニ復スルコト  
 既ニ難シ、況ンヤ和ニ當ルヲヤ、其涙ハ濁リ、其笑ハ苦ク、其容  
 ハ曇リ、其語亦澁ム、泣カズシテ可ナルベキニ泣キ、笑ヒテ要  
 セザル時ニ笑ヒ、叱責スベキニ過キテ聲高ク叱咤シ、喜ブベ  
 キヨリ意長ク喜ブ、此人間ノ俗態ヲ轉シ、暫時來テ此無心ノ  
 水ヲ觀、我亦改心セザルヲ得ザルナリ、漸クニシテ歸途ニ就



キ我家ニ著セシトキ過來シタル方ヲ眺ムレバ既ニ朦朧トシテ暮烟爨熾タリ  
 我又某日ノ曉ニ起チテ八幡宮參詣ノ途ニ就ク而シテ此行亦弟ヲ伴ヘリ、二人父母ヲ辞シ郷ヲ發シ前面平野ノ間ヲ横過スルコト凡七町ニシテ由良川ニ到リ次ニ由良郷ヲ經、林間ヲ潜行シ左往右廻スルコト十數町ニシテ遙ニ古杉老松鬱乎森列セルヲ認識スコレ郷社地ナリ、此ヨリ湖堤ヲ回リ藪下ヲ經テ遂ニ鳥居前ニ著スレバ殿宇壯嚴土地清燦人ヲシテ煮蒿悽愴タラシム、即石階ヲ昇ルコト再タヒニシテ殿前ニ著シ兄弟拍手贊頌シテ夫ヨリ殿前ヲ辞シ社地ヲ回觀シテ後底ニ到レルニ嘗テ見ザリシ一大碑アリテ是レ明治廿七八年征清軍士之碑ト大字深刻セリ、此碑ハ自然石ヲ用

キニ重臺ヲ附シタルモノニシテ其高サ凡テ一丈以テ其巨大ナルコトヲ知ルベシコレ嘗テ聞キマリシ吾村ノ有志軍人優待ノ結果ニシテ其飲食ニ費スベキ冗費ヲ省キ數百金ヲ醜集シ以テ軍功ヲ後世ニ朽滅セザラシムルノ計ニ出デタルモノナリ觀者誰カ征清軍士ノ義烈ヲ頌稱セザランヤ誰カ忠君愛國ノ志氣ヲ奮興セザランヤ又後面ニ刻セル軍士ノ名譽幾萬世ニ傳ハリテ永ク其偉蹟ヲ表スルコトヲ得ザランヤ、我ハ此前面ニ直立シテ此等ノ軍士ヲ表彰シ此碑ヲ設置セシ有志者ニ謝セリ弟ハ此碑設建當日ノ盛況ヲ再現シテ務メテ我ニ向テ説明ス我ハ謹デ彼ニ聞キ然ル後忠君愛國ノ大義ヲ諭示シ漸クニシテ手ヲ携ヘテ歸途ニ就ケリ時ニ午前十時ニシテ家門ニ著セシハ同十一時而シテ母



ハ既ニ出デテ我等ノ歸ルヲ待チツ、アリシナリ

### 第十 離別

祖宴何爲<sup>レ</sup>悲<sup>ム</sup>別離<sup>ニ</sup> 笑<sup>テ</sup>而分<sup>レ</sup>手<sup>ニ</sup>是男兒。

此行須<sup>ク</sup>達<sup>ス</sup>平生志<sup>ヲ</sup> 刮<sup>キ</sup>目<sup>ヲ</sup>他年相值<sup>フ</sup>時。

光陰不待人歲月不重來我二週間ノ暇ヲ得テ歸省シ母弟ノ  
歡迎ヲ受ケ家ニ入りタルハ邈トシテ昨日ノ如ク而シテ其  
初メニ當テハ暫時ノ孝養ヲ期シタリシニ時日ハ我ヲ待タ  
ズ一夢ノ間ニ經過シ殊ニ年頭ノ混雜ノ爲メ靜安ニ父母ニ  
仕事スルコト能ハザリシナリ、新瑞漸ク去リテ今朝既ニ五  
日ナリ、弟ハ陰ニ我ノ出郷セザルベカラザルヲ慮リテ猶幾  
日駐在スルヲ得ルヤヲ問ヒタル時我ハ父母ト共ニ驚ケリ

明日ハ六日其次ハ七日嗚呼七日ハ必ズ離別セザル可カラ  
ザルナリ父母已ニ其切迫セルヲ悟リ而シテ弟ハ解セズ再  
ビ問ヘリ我明カニ之ニ答フベキ勢力ナケレバ僅ニ折指シ  
テ示シタル時渠ハ落膽シテ唯我ヲ瞻視セリ省ミルニ此兒  
曩ニ我ノ歸家スルノ前ニ於テ机ノ内外ヲ整理シ室内ヲ掃  
除シ又家外ヲ清掃シ而シテ母ニ告テ曰フ母ヨ吾斯ノ如ク  
掃除整理シ以テ阿兄ノ歸省ヲ待ツナリ兄若シ歸家シタル  
時ハ如何ニ喜バン又誰カ斯クナシタルカヲ問フナラン母  
ヨ此時如何ニ答フルヤト我ハ母ヨリ此物語ヲ聞キテ未ダ  
忘却セザルナリ渠ハ又常ニ母ニヨリテ起居セシニ吾歸省  
ノ當日ヨリハ一日モ我側ヲ離レズ我ト起臥ヲ共ニシ我盥  
漱セバ彼亦從テ之ヲナシ我佛前ニ燒香セバ渠亦我ニ倣フ



而シテ朝夕唱歌ヲ學ビ又讀書ヲ學ベリ父母ハ陰ニ言ヘリ爾等兄弟朝ニ覺メテ共ニ唱歌ニ暮ニ靜坐シテ共ニ讀書スルヲ聞ケバ我等ハ朝起ノ苦ヲ覺エズ又身ノ老衰ヲ悲マザルナリト渠兒斯ク我ヲ慕ヒ我ニ寄ル今ヤ又我ノ去ルヲ聞キ其心中如何ニ悲哀ヲ感スルカ我亦之ヲ察シテ堪ヘズ明治廿九年ノ初涙ヲ渠ノ身ニ濺クニ至レリ

六日ハ早朝ヨリ村長、小學校長及親戚知己近隣鄉黨ヲ訪フテ離別ヲ告グ此時村長ノ囑諭校長ノ囑辭ハ懇切ノ應對トナリ遂ニ午後三時迄ヲ費シテ相別レタリ此ヨリ彼此ノ告別ヲ急ギ近隣鄉黨ニハ更ニ不在中ノ配慮ヲ請ヒ又生家ナル〇〇ニ到リ主人タル吾兄及其妻タル吾義姉ニ向テ切ニ老父母ノ孝養ヲ希望シ又老父母ニ向テ吾ガ爲ニ長壽健在

ナラントテ請ヒタリシニ老父ハ不自由ナル口調ヲ以テ我ニ教ヘテ曰ク決シテ忘ルト勿レ決シテ驕ルト勿レト我頓首教ヲ受ケ且謂ヘラク父年已ニ七十余人生命アリ又多ク望ムベカラズ今日ノ教誡或ハ最後ノ遺訓ナランモ計ルベカラズ父ノ氣象ハ矍鑠タルモ其体既ニ衰頹ヲ表セバ或ハ吾業ノ未タ成ラザルニ當テ没命スルノ不幸ヲ見ルコトアルベシ樹欲靜風不休兮人欲養親不在矣之ヲ省ミレバ潜然トシテ辭別スルコト能ハザリシニ反テ促迫セラレテ遂ニ決然離別ヲ告ゲタリ

吾家ニ皈レバ近隣鄉黨ハ既ニ來集シテ我ヲ待テリ茲ニ一同離別ノ宴ハ開カレタリ我ハ已ニ酒饗ヲ他家ニ重テタレバ氣ハ半バ狂シ腔腹充滿セリ然レドモ最後ナル吾家ノ酒



宴ニ向ヒテハ之ヲ辞スルニ忍ビズ亦母ノ勞ニ對シ且兩親ノ歡心ヲ満足セシメンガ爲飽又飽苦ンデ食ニ就キ父母弟ニ對シテ別杯ヲ往復シ又來者ニ献酬ス此間ニ於テ生家ノ老父母等亦來リテ此席ニ加ハリ遂ニ渠ノ嚴性ニ迫ラレテ我ハ起テリ此時ニ當テ若シ郷黨及老父ノ來席スルナカリセバ我ハ吾家ヲ辞スルニ窮スルヤ必セリ然レトモ幸ニ此等ニ遮斷セラレテ堪フベカラザル情操ヲシテ僅々斷決スルヲ得テ即降テ草鞋ヲ結ビタリ戶外ニハ近隣ノ兒童即弟ノ學友等相呼ビ集リテ我ノ出ヅルヲ待ツ我旅裝整ヒケレバ父母及弟ニ向テ

父ヨ母ヨ願クハ注意保養シテ病ナカラシムコトヲ  
母ヨ能ク父ヲ守リ弟ヲ愛撫シテヨ

弟ヨ能ク父母教師ノ命ヲ守レヨ 又兄ニ代リテ能ク父母ニ事ヘヨ 又能ク學校ニ勉學セヨ

來集セル學友等ニ向ヒ

弟ヲ依頼ス願クハ克ク常ニ教導シテ能ク學校ニ伴ヘヨ

郷黨ニ向ヒ

願クハ不在中能ク看顧ヲ垂レヨ

父母ハ語ヲ繼テ

汝病ム勿レ 若シ寒暑堪ヘザルコトアル時ハ輒チ報ゼヨ 決シテ身體ヲ忘ル、勿レ

弟ハ天真ノ哀情ヲ表シテ

兄ヨ復早ク歸省セヨ

我ハ背面シテ涕ヲ拭ヒ祖道ノ人ニヨリテ僅ニ意氣ヲ強ク



シテ吾家ヲ出デタリ、時維レ一月六日ニシテ暮鴉争テ罅ニ  
 歸ラントセリ門ヲ出デテ仰視スレバ最モ新正ナル元旦ノ  
 空際ハ吾途ニ向ヘトモ天ハ我ト相去ラズ、立列セル軒端ハ  
 我ヲ迎ヘテ過ギ窓ノ人ハ後又後ニ隱失ス、行々郷人ニ別告  
 シ漸クニシテ後區ニ出デ回顧スレバ吾家ハ索然トシテ僅  
 ニ舊態ノ故趾ヲ存シ、邸後ノ榆樹ハ老萎シテ未ダ春芽ヲ萌  
 セズ而シテ父母及弟ハ墻後ニ佇立シテ我ノ後貌ヲ送り居  
 レリ我ハ之ヲ觀テ感泣ニ咽ビ遠ク拜伏シテ歩ノ進ムヲ知  
 ラザリシガ送り來レル郷黨ノ爲メニ力ヲ得テ斷乎トシテ  
 前途ニ就ケリ然レトモ殘セシ父母ト弟トハ永ク眼中ノ幻  
 影トナリ尙ホ進メバ郷黨亦去リテ幻影トナリ、門閭ニ着シ  
 之ヲ辞スル時願望スレバ吾故郷亦幻影トナリ唯吾邸ノ榆

樹僅ニ雲霞ノ中ニ聳ユルヲ見ルノミ

情之學生終



明治卅四年八月四日印刷  
明治卅四年八月九日發行

(情之學生與付)

定價 八錢

不許複製

著者

高野友次郎

發行者

辻太  
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者

佐藤次郎  
東京市神田區柳原河岸十二號地

發行所

開發社  
東京市神田區美土代町二丁目一番地



# 開發社發賣書目

## 青少年必讀書

英國アレキサンデルペーン氏原著  
女子高等師範學校教授町田則文譯

### ●彌爾言行錄

本書は町田則文君が往年若輩に學び又出で、茨城縣に學官たるの際常に携へて寢食之と共にせし碩學ミル言行錄を譯述せるものなり

湯本武比古謹撰

全一冊 肖像入 定價金廿五錢  
郵税金四錢 郵券代用一割増

### ●ちよくごとくほん

本書の目的は教育 勅語の普及を裨補せんとするに在り是の故に學校兒童は更なり苟も平假名及一二三の數字を知れる者は就きて 勅語の讀例を學び又其大意を了解すること 御製及御歌を載を得べき様書となしたるものなり又附録せ「君か代」の歌の畧解

正價金拾參錢 郵券代用一割増  
郵税金貳錢

皇室御歴代の 御諡號及御名の讀例修身上有益なる古歌數十首をも載せり

山陰野史編

### ●教訓俚歌集

定價金拾五錢 郵券代用一割増  
郵税金貳錢

本書は古來の教訓的道歌數百首を蒐集して忠君孝行以下十數項に分類し雜ふるに譬喩巧妙なる散文數十篇を以てしたるものなり

山陰野史編

### ●和漢格言集

定價金六錢 郵券代用一割増  
郵税金貳錢

本書は四書五經を始め諸子百家の書を涉獵して古來の格言を集め之を忠君孝行以下修身齊家に必要なるものを十數項に分類し尙一々之に對する古來の和歌を以てしたるものなり

### 少年書類 第一篇 修身童話

拾貳冊續刊 壹冊定價金拾錢 內二卷定價金八錢  
郵税金貳錢宛 郵券代用一割増

本書は本邦有名の昔噺を撰擇し何れも著者の實驗によりて教育的に記



述せられ文章は總假名にして兒童に讀み易く挿畫は高尚優美表紙は光彩燦然又附録には有名なる「グリム」の童話を添へ且「ライオン」の教授法をも添へたり

- 高等師範學校教諭樋口勘次郎著
- 第一卷 ● 桃太郎 同 第六卷 ● 勝々々 山
- 第二卷 ● 花咲翁 湯本武比古著 第七卷 ● 狐ノ手柄
- 第三卷 ● 猿蟹合戦 同 第八卷 ● 瘤取
- 東京育啞學校校長小西信八著 第九卷 ● 大江山
- 第四卷 ● 松山鏡 同 著
- 高等師範學校教諭樋口勘次郎著
- 第五卷 ● 舌切雀

### 少年書類 第二篇 歴史修身談

本書は正史に依り歴史教授は勿論修身教授の中心と爲し得ることを勉

(續刊) 挿畫入 正價各拾貳錢 郵稅各貳錢

め又讀本中に歴史談あるも個々分裂して次第を追はざるが故に本書は優に其欠を補ひ得べし先づ「神代之話」より順次三千年間の史譚に及は

高等師範學校訓導主任誠甫著

第一卷 神代之話

第二卷 人皇の初(此分に限り)

### 少年書類 第三編 自然の友

續刊各冊挿畫入 正價各拾六錢 郵稅各四錢

本書は通俗理科に關する智識を講述せるものにして講説明白文章平易一讀の下宇宙間森羅萬象自然法則の大綱を了解するを得べし

- 秋山鐵太郎著 同 第一卷 通俗物理學講話 上二冊
- 高桑良興著 同 第二卷 通俗物理學講話 下二冊
- 堀内新泉著 同 第三卷 通俗植物學講話
- 同 第四卷 通俗動物學講話

### 家庭讀本

全四冊 各冊挿畫入 正價拾六錢 郵稅四錢



本書は材料行文、總て兒童少年の嗜好學力に適應し、小學教育と相俟ち  
り智識を研き精神を養ふを得べく、優に在來の家庭讀本に數等地を抜け

- 春の卷(既刊)
- 夏の卷(近刊)
- 秋の卷(近刊)
- 冬の卷(近刊)

横川回天謹編

### ●東宮御慶事の記

頗美本全一冊 郵税金四錢  
定價金卅五錢 郵券代用一割増

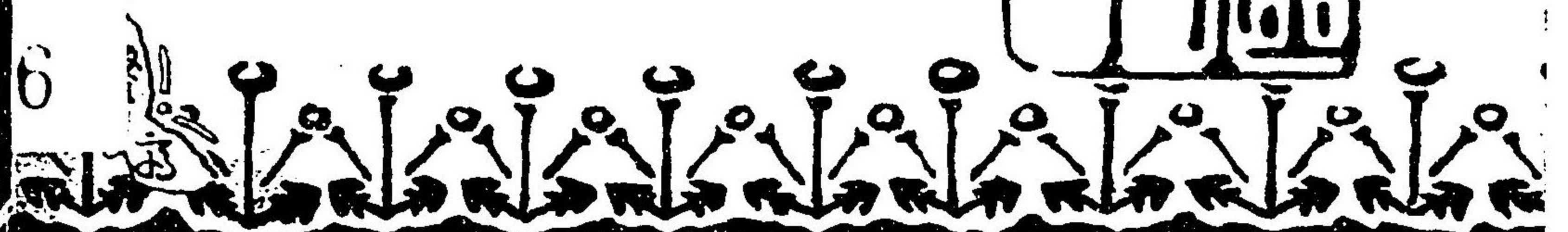
附錄 皇孫御降誕の記

本書は明治三十三年五月十日宮中に於て行はせられたる 東宮殿下御  
慶事御盛儀の御模様を全國の同朋に知らしめ家庭並に學校の教育に資  
せしむると共に永く後世子孫に傳へて益々忠孝の大義を發揮せしめん  
爲め當時に於ける諸新聞の記事及び直接見聞せる所に就きて編纂し其  
の舊記等に屬するものは更に名士及び古書の考證に據り猶ほ宮邊に因  
みある幾多名士の教正を経たるものなり





関  
發  
社  
行





情之學生

085295-000-5

特64-226

情之學生

高野 友次郎 / 著

M34

DBC-0247



特  
2